

名古屋大学 高等教育研究センター

2015年度 年次活動報告書

名古屋大学 高等教育研究センター
2015年度 年次活動報告書

2016年3月

はじめに

名古屋大学高等教育研究センター（以下、本センターと略す）は、特定部局に属さない学内共同教育研究施設として1998年4月に創設されました。設立当初より、高等教育機関の質の向上に取り組み、高等教育研究の一大拠点となることを目標に掲げ、多様な教育改善・教育支援のニーズに応えるべく、学内外の教職員との協働による種々の研究会、実践的な教材や教育プログラムの開発、FD・SDに関連するセミナー・ワークショップなど、着実にその活動を発展させてきました。そして、平成22年には、文部科学省より教育関係共同利用拠点「FD・SD教育改善支援拠点」の認定を受け、同拠点としての活動を開始しました。特に「FD・SDコンソーシアム名古屋」を中心に牽引し、中部地域を中心とした大学の教育・学生支援、教職員の自発的な教育改善への貢献に取り組んで来ました。拠点としての活動は平成26年度で区切りとなりましたが、これまでの拠点として築いてきたコンソーシアムなどの活動は、この地域の複数の大学で組織した新たな枠組みの中で継続されています。

一方、名古屋大学はスーパーグローバル大学創成支援（Top Global University: TGU）の事業が本格的にスタートし、本センターも名古屋大学のTGUの取り組みの中で教育の質保証やアクティブラーニングなどの新たな教育方法の取り組みと支援など、これまでの活動に加えて更なる教育システムの実現に向けて動き出しました。言うまでもなく、本センターは教育研究組織ですので、教育に加え研究活動も鋭意行ってきています。

本報告はこのような中で、平成27年度に本センターが取り組んで来た活動についてまとめたものです。本センターの活動をご理解いただき、今後の取り組みについてご指導、ご支援を賜りましたら幸いです。

平成28年3月

名古屋大学高等教育研究センター長 水谷 法美

目次

はじめに	1
1. 研究開発	5
[学術論文]	5
[その他執筆]	5
[講演発表]	6
[開発物]	8
[科学研究費補助金ほか研究プロジェクト一覧]	10
[研究会]	11
[国際交流実績]	24
[学術的受賞]	24
2. 業務	25
[定期刊行物]	25
[その他刊行物]	30
[研修実施]	31
[提供したサービス]	69
[提供中のオンラインサービス]	78
[学内貢献]	81
[学内講師派遣]	82
[学外講師派遣]	84
3. 教育	88
[兼任]	88
[授業担当]	88
4. 社会貢献	89
5. 管理運営	90
[人員]	90
[経費]	92
[運営委員会]	92
[センター会議 開催日程]	93

1. 研究開発

[学術論文]

◎スタッフ

Nakajima H, “How the Course Management System Affects Faculty Behaviors and Contributes to the Organizational Development”, *9th International Multi-Conference on Society, Cybernetics and Informatics Proceedings* (Jul.2015) .

夏目達也「フランスの大学における学生のキャリア形成・就職の支援」『名古屋高等教育研究』第16号、111-130頁、2016年3月。

中島英博「思考力を重視した初年次セミナーの授業設計ーチュートリアル型セミナーの試行実践ー」『名古屋高等教育研究』第16号、55-65頁、2016年3月。

丸山和昭「公認心理師法の政策形成・決定過程ー日本臨床心理士会の動向を中心にー」『名古屋高等教育研究』第16号、133-154頁、2016年3月。

◎客員

深堀聰子「大学教育のアウトカムについての合成形成」『名古屋高等教育研究所』第16号、195-214頁、2016年3月。

Joshi Mahendra Kishore, “Governance, Growth and Equity: Reflections from Indian Higher Education”, *Nagoya Journal of Higher Education*, vol.16, pp.215-243 (Mar.2016) .

吉武博通「ガバナンス改革の実効性を高めるための方策に関する一考察」『名古屋高等教育研究』第16号、179-193頁、2016年3月。

竇心浩「中国の大学における学習支援の実態と課題」『名古屋高等教育研究』第16号、245-266頁、2016年3月。

[その他執筆]

中島英博「科目ナンバリングを活用したカリキュラムの体系化とスリム化」『かわらばん』第50号、2015年4月。

夏目達也「学生の学びの質向上のために身近な教育条件の見直しを」『かわらばん』第51号、2015年7月。

中島英博「クォーター制を活かす授業デザイン」『かわらばん』第52号、2015年10月。

夏目達也「【書評】京免徹雄著『フランスの学校教育におけるキャリア教育の成立と展開』」『教育学研究』第82巻、第4号、607-609頁、2015年12月。

丸山和昭「『3つのポリシー』再考 法令改正を機に『名大生研究』の充実を」『かわらばん』53号、2016年1月。

丸山和昭「事例紹介 中部大学『報酬型インターンシップ』と社会連携の必然」『リクルートカレッジマネジメント』196号、24-27頁、2016年1月。

中島英博「第3章 PBL を成功させるために」(25-34 頁)、「第8章 多様なクラスサイズでの PBL に学生チューターを活用する方法」(81-95 頁)、「第13章 法学教育における能動的学習と情報技術の活用との統合」(145-152 頁)、「第18章 化学概論における PBL の活用」(213-228 頁)、Duch, Barbara J.・Groh, Susan E.・Allen, Deborah E.編、山田康彦・津田司監訳『学生が変わるプロブレム・ペースド・ラーニング実践法』ナカニシヤ出版、2016年2月。

夏目達也「少人数教育の効果を引き出すー名古屋大学の事例から」『大学時報』367号、40-45頁、2016年3月。

丸山和昭「事例調査 和歌山大学」『大学の組織運営改革と教職員の在り方に関する研究 最終報告書(研究代表者:川島啓二)』国立教育政策研究所、43-45頁、2016年3月。

丸山和昭「教教分離と学長の役割ー大学改革におけるリーダーシップ論を手掛かりにー」『大学の組織運営改革と教職員の在り方に関する研究 最終報告書(研究代表者:川島啓二)』国立教育政策研究所、229-239頁、2016年3月。

丸山和昭「事例紹介 藤田保健衛生大学 良き医療人の個性を導くアセンブリ入試の挑戦」『リクルートカレッジマネジメント』197号、46-49頁、2016年3月。

齋藤芳子「謎2 宇宙から見る星はきれいですか?」(20-21頁 河村晶子と共同執筆)、「謎3 宇宙には酸素がないのになんで太陽は燃えているのですか?」(22-23頁 同上)、「謎25 惑星の名前をどうやって決めたのですか?」(68-69頁)、「謎37 宇宙へ行く理由はなんですか?お金をかけるのは大変では?」(94-95頁)、「謎46 昼ざらざら照りつける太陽と、夜になるときらきら輝く星がじつは同じものだということがわかったのはいつ頃のこと、誰が発見したのですか? どうしてわかったのですか?」(114-115頁 河村晶子と共同執筆)、「謎79 さそり座は二人にねらわれているのにどうして倒す勇気がないの?」(186-187頁)、福井康雄監修、戸田山和久・河村晶子・齋藤芳子・早川貴敬・鳥居和史・佐野栄俊『ここまでわかった 宇宙100の謎』角川学芸出版、2016年3月。

[講演発表] (発表者名に○)

- 夏目達也・○澤野由紀子・篠原康正「高等教育機関における社会人の学び直し促進・支援一日・英・仏・スウェーデンの比較研究ー」日本比較教育学会第51回大会、宇都宮大学、2015年6月13日。
- 中島英博「初年次セミナー担当教員の意識変化に関するシラバステキスト分析」日本高等教育学会第18回大会、早稲田大学、2015年6月27日。
- Nakajima H, “How the Course Management System Affects Faculty Behaviors and Contributes to the Organizational Development”, *9th International Multi-Conference on Society, Cybernetics and Informatics*, Orlando, USA, 2015.7.14.
- 中島英博・中井俊樹・寺田佳孝「大学教育における本質的な問いを中心とする授業設計」SPODフォーラム、愛媛大学、2015年8月26日。
- 夏目達也・○大場淳・○田川千尋「フランスの高等教育における職業専門化 (professionnalisation) 政策の展開」フランス教育学会、山形大学、2015年9月6日。

- 安田淳一郎・千代勝実・小西哲郎・中村泰之・古澤彰浩・藤田あき美・齋藤芳子・三浦裕一「斜面で物体を転がす実験を用いた科学的推論能力の習得と評価」日本物理学会 2015 年秋季大会、関西大学、2015 年 9 月 18 日。
- 三浦裕一・中村泰之・古澤彰浩・齋藤芳子・安田淳一郎・千代勝実・小西哲郎・藤田あき美「異なる学生集団に対する FCI 調査と誤解を正す実験開発」日本物理学会 2015 年秋季大会、関西大学、2015 年 9 月 18 日。
- 齋藤芳子「科学技術コミュニケーションの著されかた 2」研究・イノベーション学会（旧 研究・技術計画学会）第 30 回年次学術大会、早稲田大学戸山キャンパス、2015 年 10 月 11 日。
- 齋藤芳子・小林信一「大学院生から見た研究活動上の問題行為」科学技術社会論学会第 14 回年次研究大会、東北大学川内南キャンパス、2015 年 11 月 22 日。
- 丸山和昭「大学でプロフェッショナリズムをどう育成するか（ディスカッサント・コメント）」広島大学高等教育研究開発センター公開研究会、広島大学東広島キャンパス、2016 年 1 月 9 日。
- 齋藤芳子「物理学講義実験とアクティブラーニング」大学教育改革フォーラム in 東海 2016、愛知大学、2016 年 3 月 12 日。
- 三浦裕一・中村泰之・古澤彰浩・齋藤芳子・安田淳一郎・千代勝実・小西哲郎・藤田あき美「潮汐現象に関する誤解を正すモデル実験開発」日本物理学会第 71 回年次大会、東北学院大学、2016 年 3 月 19 日。
- 千代勝実・安田淳一郎・三浦裕一・中村泰之・古澤彰浩・齋藤芳子・小西哲郎・藤田あき美「学生が主体的に企画・実施する実験授業による教育効果の測定」日本物理学会第 71 回年次大会、東北学院大学、2016 年 3 月 19 日。

[開発物]

◎書籍

- 中井俊樹編、中井俊樹・中島英博・井上史子・小林忠資・西野毅朗著『シリーズ大学の教授法3 アクティブラーニング』玉川大学出版部、2015年12月25日。



◎冊子

- 名古屋大学高等教育研究センター・総務部職員課・教育推進部教育企画課『名古屋大学新任教員ハンドブック 改訂版』2016年2月1日。



http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/handbook_2016.pdf

◎リーフレット

○名古屋大学高等教育研究センター作成「良識をもって学問をしよう」



◎オンラインツール

○シラバス英文表記のための例文集

シラバスの重要な項目である、授業の目的と到達目標、成績評価方法、授業計画について、シラバスとしての質を最低限担保する最もシンプルな基本文型を示しました。また、キーワードを入れ替えることで、さまざまな分野のシラバス作成に対応できるようにしました。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/esyllabus.pdf>

○名古屋大学新任教員ハンドブック (2016年改訂版)

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/handbook_2016.pdf

[科学研究費補助金ほか研究プロジェクト一覧]

科学研究費補助金 採択状況

◎センター教員が代表者として採択されたもの

種別		研究代表者	研究課題名	交付金額 (千円)
基金	挑戦的萌芽研究	夏目 達也	社会人の学び直し支援の大学・大学院継続教育の普及可能性の検証	800
補助金	基盤研究 (B)	中島 英博	質の高い教育を行う大学教員の教育観形成過程をふまえた大学教授法開発	1,400
基金	挑戦的萌芽研究	中島 英博	多人数講義を深い学習の場に変える発問群による教育技法の明示化	900
基金	若手研究 (B)	齋藤 芳子	理工系研究室の教育機能についてのエスノメソドロジーによる研究	400

◎教員一人当たりの代表者としての採択数 1.33 (5月時点)

◎代表者としての申請数に占める採択数の割合 0.8 (5月時点)

◎センター教員が研究分担者として参画したもの

教員名	種別	研究科題名	研究代表者名 (所属)	分担金額 (千円)
夏目 達也	基盤研究 (B)	アジア・太平洋地域における大学院生の移動と「準中心国」大学院のニッチ戦略	吉永 契一郎 (金沢大学・教授)	800
中島 英博	基盤研究 (B)	アジア・太平洋地域における大学院生の移動と「準中心国」大学院のニッチ戦略	吉永 契一郎 (金沢大学・教授)	500
中島 英博	基盤研究 (C)	大学における研究志向型カリキュラムに関する比較研究	中井 俊樹 (愛媛大学・教授)	500
丸山 和昭	基盤研究 (C)	教職大学院設置過程における実務家教員と学生募集定員のガバナンス分析	村山 詩帆 (佐賀大学・准教授)	200
丸山 和昭	挑戦的萌芽研究	東北地域の大学進学問題－教育社会学と比較教育学の研究手法の融合－	田中 正弘 (筑波大学・准教授)	150
丸山 和昭	基盤研究 (A)	戦後日本における教育労働運動と社会・教育システムの変容との相互作用に関する研究	廣田 照幸 (日本大学・教授)	240
丸山 和昭	基盤研究 (A)	グローバル社会におけるコンピテンシーを具体化する高度教養教育の開発研究	羽田 貴史 (東北大学・教授)	200
丸山 和昭	基盤研究 (B)	専門職養成カリキュラムをめぐるステークホルダーの合意形成に関する実証的研究	橋本 鉦市 (東京大学・教授)	214.7
齋藤 芳子	基盤研究 (B)	認識の成立・知の探求・社会生活・幸福のための記憶の役割と可能性に関する学際的研究	金山 弥平 (文学研究科・教授)	600
齋藤 芳子	基盤研究 (C)	大学で学生に自主的に企画させる物理学体験学習と評価法の開発	三浦 裕一 (理学研究科・准教授)	160

[研究会]

◎アクティブラーニング研究会

1. メンバー

代表 中井 俊樹 (愛媛大学教育企画室)
中島 英博 (名古屋大学高等教育研究センター)
小林 忠資 (愛媛大学教育企画室)
井上 史子 (帝京大学高等教育開発センター)
西野 毅朗 (同志社大学大学院社会学研究科)

2. 主な活動内容

- 1) アクティブラーニング研究会を継続し、定期的にミーティングを行いアクティブラーニングの実践の知見を共有した。
- 2) アクティブラーニングの実践方法をまとめる書籍を出版した。
- 3) アクティブラーニングに関する研修を行った。

3. 研修

中井俊樹「学生の学びを促す教授法～表面的な学習をさせない工夫～」佛教大学、2015年7月23日。
中島英博「アクティブラーニングに備える」トライデント夏季FD、トライデント専門学校、2015年8月20日。
中島英博「発問で思考を促す授業をつくる」椙山女学園大学FD、椙山女学園大学、2015年9月11日。
中島英博「アクティブラーニング入門」南山大学経営学部・大学院経営学専攻・ビジネス専攻FD、南山大学経営学部、2015年9月30日。
中井俊樹「アクティブラーニングを全学的に展開するための研修会」大分大学、2016年3月23日。

◎名古屋 SD 研究会

1.名古屋 SD 研究会の活動方針、活動内容の概要

1. 活動目的

FD・SD 教育改善支援拠点事業の 1 つとして名古屋 SD 研究会が設置されていたが、拠点事業の終了により、名古屋大学高等教育研究センターのもとに活動する 1 つの研究会組織として、平成 27 年度も引き続き教務系職員に必要な専門知識・スキル等を明らかにすることを目的とする。

2. 活動内容および目標

- 1) SD 研究会の中に教務や学生支援などの部門ができることを将来の目標として、当面の間は、教務に軸足を置いた活動を行う。
- 2) 「大学の教務 Q & A」の改訂については今後の課題とする。
- 3) 今年度の SD 研究会は、「障がいのある学生の支援」「国際化」「入試広報」「正課外学習」をテーマとして、教務事務との関係のある事項を中心に意見交換を行う。この意見交換を踏まえ、今年度の教務実践研究会第 3 回大会や大学教育改革フォーラム in 東海におけるテーマを設定する。

3. メンバー

代表 中島 英博 (名古屋大学)
上西 浩司 (豊橋科学技術大学)
小野 勝士 (龍谷大学)
加藤 史征 (名古屋大学)
川島 香織 (愛知県立大学)
辰巳 早苗 (追手門学院大学)
中村 智之 (名古屋文化短期大学)
満田 清恵 (愛知教育大学)
宮林 常崇 (首都大学東京)
村瀬 隆彦 (愛知みずほ大学)

4. 平成 27 年度の活動

①第 1 回研究会

- 平成 27 年 5 月 22 日 名古屋大学高等教育センター
- ・名古屋 SD 研究会の運営方針について
 - ・大学教務実践研究会運営上の諸課題の整理について
 - ・大学教務実践研究会第 3 回大会の概要について
 - ・「大学の教務 Q & A」の改訂の進め方について

②大学教務実践研究会ワークショップ

- 平成 27 年 7 月 3 日 名古屋大学環境総合館レクチャーホール
- ・事例で学ぶ教員免許業務

③第2回研究会

平成27年7月3日 名古屋大学高等教育センター

- ・大学教務実践研究会運営上の諸課題の整理について
- ・大学教務実践研究会第3回大会の運営について
- ・「大学の教務Q&A」の改訂について

④第3回研究会

平成27年8月18日 名古屋大学高等教育センター

- ・大学教務実践研究会運営上の諸課題の整理について
- ・大学教務実践研究会第3回大会の運営について
- ・大学教育改革フォーラム in 東海2016におけるセッションの担当について

⑤第4回研究会

平成27年10月23日 愛知みずほ大学・短期大学部1号館

- ・大学教務実践研究会の運営について
- ・大学教育改革フォーラム in 東海2016におけるセッションの担当について

⑥大学教務実践研究会第3回大会

平成27年12月5日 愛知みずほ大学・短期大学部1号館

- ・講演、分科会、ポスター発表

⑦大学教育改革フォーラム in 東海2016 分科会1

平成28年3月12日 愛知大学名古屋キャンパス

テーマ：「今、大学の中で職員は何をなすべきか

—大学が変革を求められる中、変革を推進する職員像を模索して—

II. 大学教務実践研究会の活動方針

1. 活動内容および目標

- ・教務に関する実践的知識の探究、それらの蓄積及びネットワーク構築並びに次世代の教務系職員の育成等（趣意書より）。
- ・教務事務の実務的な内容を中心とする。

2. 運営体制

代 表	小野 勝士（龍谷大学）
副 代 表	辰巳 早苗（追手門学院大学）
事務局長	宮林 常崇（首都大学東京）
運営アドバイザー	上西 浩司（豊橋科学技術大学） 村瀬 隆彦（愛知みずほ大学）
運営委員	加藤 史征（名古屋大学）

	川島 香織 (愛知県立大学)
	中島 英博 (名古屋大学)
	中村 智之 (名古屋文化短期大学)
	満田 清恵 (愛知教育大学)
運営協力者	中井 俊樹 (愛媛大学)
	松田 和才 (名古屋大学)
	森 征一郎 (名古屋大学)

3. 活動内容

- ①年次大会の開催 (12月)
- ②ワークショップの開催
 教務実践コミュニティの活動の実質化
 - ・教職課程
 - ・教務管理職マネジメント
 - ・教務職員研究
- ③教務事務を取り巻く課題の可視化と情報提供
- ④「大学の教務Q&A」の改訂にあたっての意見募集

III.活動内容詳細

1. 大学教務実践研究会ワークショップ

(平成27年7月3日 名古屋大学環境総合館レクチャーホール)

(1) 開催の趣旨

「事例で学ぶ教員免許業務」というテーマで2013年度に引き続き、2回目の開催となった。教員免許業務は、教務において取扱いが難しく問題も発生しやすい業務と言われている。正しく教員免許業務を進めるには、学生への履修指導等のために自大学のカリキュラムだけではなく、カリキュラム構築の拠り所となる教育職員免許法や教職課程認定基準等について正しく理解しておく必要がある。本ワークショップでは、カリキュラム変更時に教員免許業務の現場で実際にあった事例を紹介しながら、カリキュラム変更時に必要となる文部科学省への届出書類作成のポイントをワークショップ形式で学ぶこととした。

(2) 参加者数：78名

(3) 参加者アンケートより (アンケート提出者数：67名、提出率：86%)

①業務の参考になりましたか。

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1. 参考になった【65 (97%)】 | 2. ある程度参考になった【2 (3%)】 |
| 3. どちらともいえない【0】 | 4. あまり参考にならなかった【0】 |
| 5. 参考にならなかった【0】 | |

②内容はどうでしたか。

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. 難しかった【12 (18%)】 | 2. 少し難しかった【33 (49%)】 |
| 3. 普通であった【21 (31%)】 | 4. 少し簡単だった【0】 |
| 無回答【1 (2%)】 | 5. 簡単だった【0】 |

③進め方について

1. 満足した【54 (81%)】
2. ある程度満足した【13 (19%)】
3. どちらともいえない【0】
4. あまり満足しなかった【0】
5. 満足しなかった【0】

2. 大学教務実践研究会第3回大会

(平成27年12月5日 愛知みずほ大学・短期大学部1号館)

(1) 開催の趣旨

これまでの大会・ワークショップで実施したアンケートの結果を踏まえ、今回は「障害」「単位認定(教職)」「職員能力開発」をテーマとした3つの分科会を設け、現場で課題に直面している教職員が集い、実践的な知識を共有する。その中でも「障害のある学生への支援」では、障害者差別解消法の施行を目前に控え、喫緊の課題であることから、基調講演も設定する。

(2) 参加者数：90名

(3) 分科会報告

①特別な支援が必要な学生への対応について

入学してくる学生のなかに発達障害が疑われる学生が増える中、当然のことながら、学生の教育や生活の場であり、地域の資源でもある大学としては、こうした配慮を必要とする学生をどう支援していくかは喫緊の課題である。これまでの学生相談室でのともすれば孤立しがちな「深いケア」だけでなく、学内の様々な障壁を減らすことで、学生が自己理解を深め自ら活動に踏み出していけるよう支援することが必要となる。こうした考え方に基づき、組織間の調整役であり学内外のネットワークを広げる専門職としてのキャンパスソーシャルワーカーを配置している日本福祉大学から、その役割や機能について澤田佳代氏よりご説明いただいた。

分科会後半では、「自分は発達障害らしいので配慮して欲しい」と学生から申し出てきたと実習先から大学に連絡を受けたという設定で、学生の実習参加意欲を損なわずにどういった支援・対応を行うかについて、小グループに分かれ事例検討を行った。各グループでは非常に熱心なディスカッションにより、様々な調整と方針をどう進めていくか支援方策の検討が繰り広げられた。澤田氏からグループディスカッションの振り返りにおいて、「参加させる」という基本的な意思決定の共有が実は重要でありながらも難しいとのコメントもあり、大学の現実局面での困難さを感じた。また、基調講演でご講演いただいた安田先生には分科会の最後までご同席いただき、発表において実習先への配慮が行き届いている点に感心したとのコメントを頂戴し、教職協働の必要性についても認識を新たにした。

分科会の最後ではコーディネーターの水谷早人氏から、日本福祉大学でのキャンパスソーシャルワーカーの取り組みを俯瞰し、日本に先行して障害者差別禁止を実施しているアメリカの大学事例も踏まえた発展的なまとめが行われた。学生の困り感に向き合うことから出発し、個別状況に応じた支援を探っていくには、関わる教職員、保護者を含めたチーム支援が求められるとの見地から、これを支える学内環境づくりが大学改革にもつながる。「学生のアドボケーターとしての個別支援から大学改革(メゾ支援)へ」との言葉でまとめられ、いろいろな面での学生支援に必要な観点であることを共有して分科会を終えた。

②入学前の既修得単位の認定実務(教職関係の単位認定事例をもとに)

編転入生の単位認定については、入学者の出身学科等の課程認定の有無や認定状況によってお

よそ 11 の対応パターンに分けることができる。そのパターンの中においても適用法令が複数あり、それに大学の裁量の余地を加えると実に多様なパターンが存在する。

法令の解釈事例がたくさんあることから、法令の解釈を誤ると免許状申請の局面において申請を受け付けられないことが生じる。

上記のとおり多様なパターンと解釈事例を体系立てて整理したものが全国的にない状況がこのテーマの理解を複雑にしている。

このような問題の所在に対して次の 2 点を目的に分科会を実施した。

- 1) 教職関係単位の認定等についての法令および解釈事例について参加者間で認識を共有する。
- 2) 認定手続きについては、法令および解釈事例に基づき、大学の裁量を加えながら行うこととなる。各大学の手続き方法について意見交換・事例交流を進め、新年度の認定実務等履修指導に役立てる機会とする。

会の前半ではコーディネーターの龍谷大学小野氏から龍谷大学文学部の編転入生の受け入れ事例をもとに、入学前・入学時・履修登録の各段階における対応について、法令の適用と大学の裁量部分について、資料に基づき講義形式で説明がなされた。

後半は講義を受け、グループごとで所属大学の事例を紹介しあって、これまでの困難事例や疑問点について意見交換を行った。

学生のこれまでの履修状況により対応が異なるためケースバイケースの対応になることもあるが、法令の定める一定の基準を知ることができたという意見が多数を占めた。今後は今回の分科会で出会った他大学職員との連携を深め、他大学の知恵を借りながら対応していくのも 1 つの方法であることを確認し分科会を終えた。

③教務・学生支援部門における職員育成・業務改善（若手～中堅職員向けワークショップ）

参加者それぞれの職場における課題や改善事例を共有・整理することと、それらについて気軽に照会できる人的ネットワークを構築することを目的として、大会としては初の試みとして若手～中堅職員向けワークショップを開催した。

分科会の前半では、教務・学生支援部門の現場で散見される課題について進行役が論点を整理した後、立教大学教務部深野毅氏から「教務業務担当のミッションステートメント」について取組事例をご報告いただいた。後半は「教務・学生支援部門スタッフの『あるべき姿』を見つける」をテーマとして、①各グループで「あるべき姿」を 1～3 つ程度に集約し、②それを実現するための障壁を具体化し、乗り越えるための仕掛けを検討した。これらは職場環境によって異なるため、集約結果がそのまま各職場で活かせるわけではないが、本分科会の目的は、参加者のみなさまのご協力のおかげで概ね達成された。

本研究会はサイボウズ上で情報交換を行っているが、ネットワーク上に活字で表現することが難しい事項も多く、今回のように自由に意見交換できる機会を設けてほしい等、今後の活動を検討する上で有益な声を数多く頂戴することができた。ただ「若手～中堅」「教務・学生支援」という大きくくりで参加者を募ったため、議論が発散し、集約が難しいといった課題も明らかになったので、次回以降は、テーマや対象者を絞るなどの方策を検討し、顔を合わせる機会だからこそできる情報交換の場を企画したいと思う。

(4) 参加者アンケートより（アンケート提出者数：76名、提出率：84%）

①講演は業務の参考になりましたか。

1. 参考になった【61（80%）】 2. ある程度参考になった【15（20%）】
3. どちらともいえない 4. あまり参考にならなかった 5. 参考にならなかった

②ポスター発表はあなたの業務の参考になりましたか。

1. 参考になった【39（51%）】 2. ある程度参考になった【24（32%）】
3. どちらともいえない【7（9%）】 4. あまり参考にならなかった【1（1%）】
5. 参考にならなかった 6. ポスター発表を見ていない【5（7%）】

③分科会はあなたの業務の参考になりましたか。

ア) 分科会1

1. 参考になった【18（90%）】 2. ある程度参考になった【2（10%）】
3. どちらともいえない 4. あまり参考にならなかった 5. 参考にならなかった

イ) 分科会2

1. 参考になった【29（88%）】 2. ある程度参考になった【2（6%）】
3. どちらともいえない 4. あまり参考にならなかった 5. 参考にならなかった
無回答【2（6%）】

ウ) 分科会3

1. 参考になった【13（59%）】 2. ある程度参考になった【7（32%）】
3. どちらともいえない【1（5%）】 4. あまり参考にならなかった
5. 参考にならなかった 無回答【1（5%）】

3. 大学教育改革フォーラム in 東海 2016 分科会1

（平成28年3月12日 愛知大学名古屋キャンパス）

(1) テーマ：「今、大学の中で職員は何をなすべきか

—大学が変革を求められる中、変革を推進する職員像を模索して—

司 会：村瀬隆彦（愛知みずほ大学・短期大学部・事務局長）

大学職員に係る多様な議論を集約するかのように、中央教育審議会において、職員組織の見直し等が議論されており、職員の役割拡大と職能開発の制度化が期待されている。

しかし、大学の現場において職員の役割拡大や意識改革を妨げている障害とも言えるものにも着目しなければ、実効性のある議論にはならないのではないか。それは、職員組織の文化の問題であったり、国立大学における異動官職に関わる問題であったり、学生支援の視点の欠落であったり、そもそも大学のマネジメントに関する問題等々である。

個々の職員の能力が向上したとしても、その職員の能力を発揮する場がなければ、また、それらの人材を活かすリーダーがいなければ宝の持ち腐れとなってしまう。

そのような課題を整理した上で、大学の真の発展に寄与するために、職員は何を学び何をなすべきなのかを改めて考えてみたい。併せて、大学を動かすことができるのはどのような職員なのか、あるいは、どのような職員組織であるのかも模索してみたい。

①「その渦を巻き起こす羽ばたきは誰によるか？」

加藤史征（名古屋大学研究協力部社会連携課・係長）

大学変革の時代にあつて、渦巻く突風の中を先導するべきは「誰」なのか。

これからのあるべき大学職員像については、これまでも、様々な場面で議論されている。曰く、企画力がある、実行力がある、学生のことを一番に考えられる、知識に裏付けがある、教職協働ができる、等々。そうした力を備え、発揮できる大学職員であれば、大学改革の一翼を担うことは間違いない。大学がその翼なしで羽ばたくことは不可能であり、つまり、大学職員は大学改革に必須なのである。

では、国立大学において、そうした翼たりうる大学職員を務めるのは「誰」なのか。

国立大学には、平成16年4月1日の国立大学法人化以前から今日に至るまで、「異動官職」という慣習が存在する。「異動官職」のもたらす功罪とは何か。中部地方のとある旧帝国大学の事例を参考に、「異動官職」という習慣を素材にしながら、国立大学の改革を担うのは「誰」なのか、考えていきたい。

②「学生の成長のための大学改革」

辰巳早苗（追手門学院大学理事長・学長室大学事務課・課長）

高等教育機関たる大学、中でも私立大学の存在意義は「入学する学生が成長し、その後の人生をいかに実り多いものにできるか」に尽きるとも言える。「志願者の意欲を確認して入学後の活動を促進すること」、「学びやすさの観点で学生の学びを整備し支援していくこと」、「さまざまな障壁をクリアして社会で活躍できる人材としてキャリアスタートすること」など、大学の存在意義を果たすために重要な取り組みはさまざまな領域に広がり、さらに深化している。

これに対応するには、従来の大学のあり方だけでは難しく、学生の成長のために何を提供すべきなのかという観点から大学運営を検討していくことが必要になっているのではないだろうか。そして、教員であるか職員であるかに関係なく、大学運営に参画しようとし、改革を推進していくことが必要となるのではないだろうか。

そこで、「学生の成長のため」という観点から、あらためて大学改革を考えてみたい。

③「優秀な職員は、大学の価値を極大化するか？」

大津正知（九州大学学務部学務企画課・学務企画専門員）

いわゆる“優秀な職員”とはどのような職員を指すのだろうか。また、大学改革や効果的なSDのために、職員に求められる知識・能力に関する議論が続いているが、そこで想定される知識・能力を備えた職員の存在が、その大学全体の価値を本当に高めているのだろうか。

視点を変えて言えば、教員、学生、または学外から評価の高い職員が、職員組織の評価基準では必ずしも適正に評価されていないというケースは往々にしてあるのではないか。つまり、事務系の職員組織としての価値と大学全体の価値の整合性は自明とは限らないと考える。

職員が大学改革の一翼を担うためには、個々の職員のスキルアップと同時に職員組織の価値や業務の在り方の見直しが必要ではないだろうか。大学改革における職員像の議論を、職員個人と職員組織の双方の課題として捉え、大学全体がシステムとして機能を高度化し、真に大学の価値の極大化に貢献する職員やその育成について展望したい。

(2) 参加者数：90名

(3) 分科会概要

大学職員に関して、中教審大学教育部会などにおいて「職員の資質向上・SDの義務化」「事務組織の見直し」「専門的職員の設置」について議論がなされている。「名古屋SD研究会」において「大学教務実践研究会」は教務の実践的知識の積み上げと継承を目指した活動を進めているが、この分科会では、3名からの報告と参加者全員による議論を以って「職員の役割拡大と職能開発」という課題に取り組むための場とすることを目指した。

報告①：私立大学とは異なる面を持つ国立大学という組織において特異な在り方を見せる異動官職の功罪を取り上げ、多様な人材により構成される組織の発展を見据えた上で大学職員の在り方について考えを深める枠組みが提供された。まずは、自ら羽ばたこうとする者により渦は生まれるのであり、「大学で働こう」と意識することの大切さが語られた。

報告②：個々の大学がミッションとして掲げ3つのPolicyを通して示す機能をしっかり理解した上で、その意義を支え拡大する責任を負う者として職員も役割を果たすことが必要である。基礎となる知識・学外の情報・多様な構成員の目線・矜持を持つこと、頭・耳・目・心を研ぎ澄まし、「教育機関運営のスペシャリスト」として職員の目指すべき方向が示された。

報告③：職員として「優秀である」ことよりも「大学に貢献する」ことを優先する。大学という組織において職員が拠って立つ集団の価値観・文化が存在することが指摘され、例えば予定調和以外認めないなどその特徴が鋭く描き出された。その上で、大学の価値を高める職員になるために、大学(規定・機能・目的)を理解することから出発し、システムやプロセス、リーダーシップの在り方を見つめ直し、さらに考察を広げ進めることができることが示された。

導入と報告を受けて、会場全体で積極的な質疑応答がなされた。その中で、「私立大学に勤務しては知り得なかった異動官職という制度を通して職員の在り方を問い直す機会となった」、「アサーティブプログラムのような先進的な取り組みを生み出す大学の職員の発想に触れられた」、「冒頭に取り上げられた職員の資質向上、事務組織の見直し、専門的職員の設置という3つの視点が学内で共通認識を持つためのきっかけとなる」などの感想が寄せられた。併せて、有能な職員の例として、教員と教員を繋ぎ相乗効果を生み出せる職員、効果を上げるようなデザインができる職員、組織の新たな価値を作り上げられる職員といった「つなぎ役・触媒」としての機能の紹介がなされた。

この分科会を通して、「大学において重要な役割を担っている」という自覚を持つことの大切さと、個々の大学の発展と目標の達成に貢献する職員として日々の業務を見つめ直す際に拠り所となる観点の共有がなされたように思われる。

IV. 成果と今後の課題

1. 成果

- 1) 活動範囲に新たなテーマ(国際化・障がい学生支援・正課外学習・入試広報)を設定し、現場を取り巻く今日的な課題について検討を開始した。
- 2) 教職課程・障がい学生支援について、大学教務実践研究会ワークショップや第3回大会を通じて実践的な知識や最新情報を広く提供することができた。

- 3) 職員の人材育成を取り巻く課題について、大学教務実践研究会第3回大会や大学教育改革フォーラム in 東海 2016 を通じて論点整理を行い、現場のニーズを明確化することができた。
- 4) 「大学教務実践研究会」を継続的に運営するために必要な諸課題の整理を行うことができた。

2. 今後の課題

- 1) 今年度設定した新テーマ(国際化・障がい学生支援・正課外学習・入試広報)の検討内容について、実践的な知識を現場へ広く提供できるレベルまで高める必要がある。
- 2) 大学教務実践研究会の会員ニーズである「顔の見える交流」「本音で情報交換できる環境」について、現在運用しているサイボウズだけでは限界がある。
- 3) 活動経費を安定的・継続的に確保するスキームが確立できていない。

◎名古屋哲学教育研究会

1. メンバー

代表 戸田山 和久（名古屋大学大学院情報科学研究科 教授）

幹事 久保田 祐歌（徳島大学総合教育センター 特任助教）

2. 活動目標

名古屋地区等で哲学を教える教員が、所属大学を超えて日ごろの教育実践を共有し、知見を交換する機会を提供する。同時に、哲学を専門とする大学院生が、教授法について学ぶ機会を提供する。

3. 本年度の活動内容

昨年度、研究会に設置した「クリティカルシンキング教育部門」において、クリティカルシンキングの教育目標、教育方法、評価に関する調査研究を進めていく上での基礎として、関連文献を収集・整理した。また、クリティカルシンキング教育部門の活動に関連して、部門メンバーが初年次教育学会大会において、ワークショップ「クリティカル・シンキングを育成する初年次教育」の講師（共同）の一人を務めるなど、クリティカルシンキング教育の実践についても研究会活動の視野に入れた。今後も、哲学を専門としない学生に対するクリティカルシンキングの教育に焦点を当てた活動を継続していく予定である。

4. 本年度の活動成果

1) 研究会の「クリティカルシンキング教育部門」において、クリティカルシンキング教育に関する文献収集等を行い、教育方法、評価方法に関する論点を整理した。

2) 研究会の活動に関連して、第8回初年次教育学会大会（2015年9月3日、於：明星大学）において、ワークショップ「クリティカル・シンキングを育成する初年次教育」（3名の担当者の中の1名は、研究会メンバーの久保田祐歌）を行った。

◎物理学講義実験研究会

1. メンバー

- 代表 三浦 裕一 (名古屋大学大学院理学研究科 准教授)
小西 哲郎 (中部大学工学部 教授)
中村 泰之 (名古屋大学大学院情報科学研究科 准教授)
古澤 彰浩 (名古屋大学教養教育院 専任講師)
千代 勝実 (山形大学基盤教育院 教授)
齋藤 芳子 (名古屋大学高等教育研究センター 助教)
藤田 あき美 (信州大学工学部 講師)
- 幹事 安田 淳一郎 (山形大学基盤教育院 准教授)

2. 活動目標

理系講義で学生が体験的に学習する機会を作り、理論と実験を関係づける手法の1つとして、講義中の実験(以下、「講義実験」)を導入する方法がある。現在、講義実験の器具開発と活用には、各大学の教員が各自で取り組んでおり、そのノウハウが共有されていない。そこで我々は、学内外の講義実験に関するノウハウを抽出し、各大学の教員間で共有できるネットワークを形成することを目的として活動を行っている。

3. 本年度の活動内容

- 1) 新規講義実験の開発・集積
- 2) 既存講義実験の調査と改善
- 3) ハンドブック・ウェブサイトの普及
- 4) ハンドブック・ウェブサイトの体裁・機能の改善
- 5) 講義実験の効果測定法・評価法の検討と実施

会合日

2015年5月18日、6月22日、7月31日、9月10日、10月15日、11月12日、12月10日、
2016年1月14日、2月18日、3月12日。

4. 本年度の活動成果

- 研究論文 安田淳一郎・千代勝実・三浦裕一「系統的講義実験を通じた科学的推論能力の獲得と評価—斜面で物体を転がす実験を題材として—」『科学教育研究』第39巻、第4号、327-334頁。
- 研究発表 安田淳一郎・千代勝実・小西哲郎・中村泰之・古澤彰浩・藤田あき美・齋藤芳子・三浦裕一「斜面で物体を転がす実験を用いた科学的推論能力の習得と評価」日本物理学会2015年秋季大会、関西大学、2015年9月18日。
- 研究発表 三浦裕一・中村泰之・古澤彰浩・齋藤芳子・安田淳一郎・千代勝実・小西哲郎・藤田あき美「異なる学生集団に対するFCI調査と誤解を正す実験開発」日本物理学会2015年秋季大会、関西大学、2015年9月18日。
- 研究発表 小西哲郎「ドップラー効果の参加型学習」日本物理学会2015年秋季大会、関西大学、2015

年9月18日。

研究発表 齋藤芳子「物理学講義実験とアクティブラーニング」大学教育改革フォーラム in 東海 2016、愛知大学、2016年3月12日。

研究発表 小西哲郎「予習してのぞむ分光実験」大学教育改革フォーラム in 東海 2016、愛知大学、2016年3月12日。

研究発表 千代勝実「学生主体型物理学実験と教育効果測定」大学教育改革フォーラム in 東海 2016、愛知大学、2016年3月12日。

研究発表 藤田あき美「空手の力学：空手チョップで板を割れるか？」大学教育改革フォーラム in 東海 2016、愛知大学、2016年3月12日。

研究交流 セッション「物理学の講義実験から体験学習への発展の可能性を探るーその3」大学教育改革フォーラム in 東海 2016、愛知大学、2016年3月12日。

研究発表 三浦裕一・中村泰之・古澤彰浩・齋藤芳子・安田淳一郎・千代勝実・小西哲郎・藤田あき美
「潮汐現象に関する誤解を正すモデル実験開発」日本物理学会第71回年次大会、東北学院大学、2016年3月19日。

研究発表 千代勝実・安田淳一郎・三浦裕一・中村泰之・古澤彰浩・齋藤芳子・小西哲郎・藤田あき美
「学生が主体的に企画・実施する実験授業による教育効果の測定」日本物理学会第71回年次大会、東北学院大学、2016年3月19日。

成果公開 中村泰之・藤田あき美・齋藤芳子・安田淳一郎「英語版ウェブサイトの構築」。

[国際交流実績]

◎機関訪問

夏目達也	2015年11月12日	パリ第1大学 (フランス)
夏目達也	2015年11月12日	国立大学長協会 (フランス)
夏目達也	2015年11月13日	パリ第6大学 (フランス)
夏目達也	2016年3月14～15日	ストラスブール大学 (フランス)
夏目達也	2016年3月16日	ロレーヌ大学 (フランス)
中島英博	2016年2月22～23日	アリゾナ大学 (アメリカ)
中島英博	2016年2月25～26日	カリフォルニア大学デービス校 (アメリカ)

◎参加国際会議

中島英博 2015年7月13～16日
「9th International Multi-Conference on Society, Cybernetics and Informatics」 (アメリカ)

[学術的受賞]

Nakajima H, (Best Paper Award) “How the Course Management System Affects Faculty Behaviors and Contributes to the Organizational Development”, 9th International Multi-Conference on Society, Cybernetics and Informatics, 2015.7.14.

2. 業務

[定期刊行物]

◎ジャーナル

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/sixteenth.html>

名古屋高等教育研究 第16号

このジャーナルがめざすもの

編集委員会

[特集—学生の学修支援と大学教育]

特集の趣旨

夏目 達也

資質・能力を醸成する学修プログラムの開発

栗本 英和・栗本 昂輝

—Active Learning による思考の多様化と深化—

貧乏人の反転授業

山里 敬也

「臨床環境学」研修の試み—新しい博士研究者をめざして—

中村 秀規・加藤 博和・高野 雅夫

思考力を重視した初年次セミナーの授業設計

中島 英博

—チュートリアル型セミナーの試行実践—

[研究論稿]

アメリカの研究大学における大学運営集団の二重性

吉永 契一郎

大学生のリフレクション・プロセスの探究

秋吉 恵・河合 亨

—サービス・ラーニング科目を事例に—

フランスの大学における学生のキャリア形成・就職の支援

夏目 達也

公認心理師法の政策形成・決定過程—日本臨床心理士会の動向を中心に—

丸山 和昭

戦前における私立大学校友会の役割—関西地区私立大学を中心に—

原 裕美

[特別寄稿]

ガバナンス改革の実効性を高めるための方策に関する一考察

吉武 博通

大学教育のアウトカムについての合意形成—テスト問題作成を通じた取組—

深堀 聡子

Governance, Growth and Equity:

ジョシ・マヘンドラ・キショア

Reflections from Indian Higher Education

中国の大学における学習支援の実態と課題

寶 心浩

[研究資料]

修学困難な留学生への対応に関する課題と提案

西山 聖久・浅川 晃広

日米における中規模大学のIR活動に関する事例研究

畷田 敏行・藤原 宏司・小湊 卓夫

主体的な学びを促すアカデミック・ライティングの段階的指導法の開発

中東 雅樹・津田 純子

◎季刊紙「かわらばん」

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/kawaraban.html>

かわらばん 50号 (2015年4月)

巻頭「科目ナンバリングを活用したカリキュラムの体系化とスリム化」

グローサリー「教授会」

かわらばん 51号 (2015年7月)

巻頭「学生の学びの質向上のために身近な教育条件の見直しを」

グローサリー「チューニング」

かわらばん 52号 (2015年10月)

巻頭「クォーター制を活かす授業デザイン」

グローサリー「アカデミック・インテグリティ」

かわらばん 53号 (2016年1月)

巻頭「『3つのポリシー』再考－法令改正を機に『名大生研究』の充実を－」

グローサリー「履修系統図」

◎e-Newsletter Friends

FRIENDS vol.9

December 2015 [info8364] 2015.12.21

E-bulletin from the Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University.

Dear colleagues of CSHE,

Season's greeting!

I am Norimi Mizutani, the director of Center for the Studies of Higher Education(CSHE). Time flies so quickly and one and half years have passed since I was assigned as the director at the beginning of April 2014.

Since 1998, the CSHE has contributed to education improvement at universities through conducting faculty development (FD) and staff development (SD).

In 2010, CSHE was authorized as an Inter University Hub to support faculty and staff development by MEXT, and CSHE promoted many activities for FD and SD.

This program expired at the end of March, 2015. We, however, continue to our mission to support the improvement of university education. Also, we have started to engage other missions relating the Top Global University Project under the support of the Japan Society for the Promotion of Science.

In April 2015, Dr. Nakai moved to Ehime University and promoted to professor, and Dr. Kobayashi also moved to Ehime University. However, Dr. Saitoh came back from her baby break in April 2015 and Dr. Maruyama has joined to CSHE as Associate Professor since October 2015. We faculty members in CSHE will do our best in contributing the improvement of the education in our university.

So, I hope your kind consideration and kind support to CSHE.

Lastly, I wish your happy holidays and happy new year.

Norimi Mizutani, Dr.Eng., Director of CSHE

=== CSHE Features =====

Visiting scholars:

Professor, Joshi Mahendra Kishore (Maharaja Krishnakumarsinhji Bhavnagar University, India, April–July 2015)

Aoosiate Professor, Dou Xinhao (Shanghai International University, China, December 2015–March 2016)

New members:

Kazuaki Maruyama, Dr. (October 2015–, Associate Professor)

Junko Morishita, Ms. (July 2015–, Administrator)

Alumni:

Toshiki Nakai, Mr. (–March 2015, Associate Professor)

Tadashi Kobayashi, Mr. (–March 2015, Research Fellow)

Fumi Suzuki, Ms. (–March 2015, Assistant)

Hotaka Ito, Mr. (–March 2015, Technical Assistant)

Hanae Maki, Ms. (–January 2015, Administrator)

Tomoko Ariga, Ms. (–March 2015, Administrator)

Reiko Kakiage, Ms. (April–June 2015, Administrator)

Assistants:

Kukiko Okada, Ms. (June 2004–, Assistant)

Chika Taniguchi, Ms. (September 2014–, Assistant)

Technical Assistants:

Kazuki Kumazawa, Mr. (January 2014–, Technical Assistant)

Kohei Ichioka, Mr. (December 2014–, Technical Assistant)

2015 Major events:

New Faculty Guidance (Spring & Autumn)

Preparing Future Faculty Course (Summer, for graduate students, with credits)

Forum for Academic Administrators (Winter)

[Coming soon]

Nagoya Univ. Academic Essay Contest for Undergraduate (Winter)

Forum for University Reform in Tokai 2016 (Spring)

===CSHE member up to date=====

Name: Tatsuya Natsume

Satatus: Professor

Comments:

This spring the center was led into a difficult phase. Not a few members have left our center and the big program as a hub university for FSDS was expired.

Dr. Nakajima and I had to manage New Faculty Guidance by just the two of us in April. However, the end of that month the assistant professor returned from childcare leave and a new associate professor arrived in October! Now the center is regaining its liveliness with their cooperative working.

Moreover, the new space named “Active Learning Studio” opened this spring.

The studio was established in our center with much ingenious device promoting students’ active learning. The layout is changeable in accordance with the situation of group discussion. It also has three multi-screens projecting various data sources wirelessly. Many classes and seminars have already been held in this studio up to date.

Please drop in and see us and the new studio when you’re next in Nagoya!

Name: Hidehiro Nakajima

Status: Associate Professor

Comments:

I hope everything goes well with you. My second term at CSHE was an awesome experience, full of fun and really interesting higher education topics.

This year, I was engaged in a project to compile theories and methodologies in teaching and learning comprehensively into 6 books in the series, and just published first one as “Active Learning” directed by professor Nakai, one of the former CSHE staff. Currently, I am trying to accomplish editing the second one of the series “Course Design” by the end of this year.

In this fall semester, I tried to put case method teaching into my class for master students studying in our professional degree program in higher education. It seems quite effective and interesting for our students to understand the theories and concepts used in organizational management deeply. I would be happy if I could collaborate with CSHE alumni on the research of organizational management in higher education.

Name: Kazuaki Maruyama

Status: Associate Professor

Comments:

Dear colleagues of CSHE, nice to e-meet you. I am Kazuaki Maruyama. I started to work as staff of CSHE from this October. Previously, I was working in Fukushima university as a member of center for research and development of education.

I had various experiences about education improvement, such as projecting faculty development, staff development, faculty survey, student survey, so on.

My hometown is Tsuruoka city in Yamagata prefecture, and I spent my undergraduate and graduate days in Sendai city as a student of the Tohoku University.

My specialty is educational sociology. In particular, I have been studying about professional education and licentiate, and political process of higher education.

Recently, I have been interested in the policy making process of national certification, and the career development of academic professions.

As a new member of CSHE, I would like to contribute to study and improvement of CSHE. I'm looking forward to collaborating with you.

Name: Yoshiko Saitoh

Status: Assistant Professor

Comments:

I hope this message will find you well. I have finally come back to the Center from the childcare leave. The Center had had much change during these years, as well as the higher education settings. I have been enjoying such a differences since my return.

My area of research is still varied; research supervision, skills training in graduate education, science communication, research/academic integrity, and so on.

An event worthy for mention is that I have received several offers of assistance around the education of research ethics/integrity, which had become a duty of Japanese research institutions. I have also nearly worked out the revision of the New Faculty Handbook, and early in the 2016, I will devote to the steering of the Academic Essay Contest as a chief secretariat.

Shortly, the Center will start a voyage for another horizon. We hope to have your continued suggestions and support for us, which are always appreciative, more than ever before.

May the year 2016 be delightful for all of you.

=====
Center for the Studies of Higher Education

Nagoya University

Furo, Chikusa, Nagoya 464-8601, Japan

Tel +81 52 789 5696 Fax +81 52 789 5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

URL <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp>

[その他刊行物]

◎自己評価報告書 2008-2014

名古屋大学高等教育研究センター編、2015年8月。



http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/selfeval_2008_2014.pdf

◎外部評価報告書

名古屋大学高等教育研究センター編、2016年2月。



http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/review_2008_2014.pdf

[研修実施]

◎客員教授セミナー

○ 2015年7月9日 第75回客員教授セミナー

「教育目標・学習成果の合意をいかに形成するかーテスト問題作成を通じた取組ー」



講 師：深堀 聡子（国立教育政策研究所・高等教育研究部・総括研究官）

日 時：2015年7月9日 16:00～18:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概 要：教育目標に適合的な教育課程を設計・実践することが重要であることは、教育段階を問わず論を俟たない。大学教育においても同様であり、教育課程の体系化を実現する前提として、教育目標や達成すべき学習成果の明確化が求められている。しかしながら、学問分野と大学組織の自律性と多様性が尊重されてきた大学では、何を教育目標とするのかについての合意を形成すること自体が、学問分野としても学内組織としても容易ではない。

本講演では、工学分野でのテスト問題バンクの取組を取り上げる。これは、国内外の大学教員が集い、テスト問題や採点基準を共同で作成して共有することを通じて、教育目標や達成すべき学習成果に関する意見を調整して合意を形成することを目指すものであり、通常とは逆のプロセスをとる。この取組が、大学教育に与える効果や今後の課題について検討する。

講演要旨

名古屋大学高等教育研究センター第123回招聘セミナー(平成26年4月24日)では、OECD-AHELO フィージビリティ・スタディの取組の成果と課題について紹介し、大学の教育改善に資する国際的な学習成果アセスメントの在り方について議論する機会をいただいた。

OECD-AHELO フィージビリティ・スタディ(平成20～24年)とは、大学教育のアウトカムを世界共通のテストを用いて測定することが可能かどうかを検証する調査研究で、日本は工学分野で参加した。この取組より、工学教育では大学教育を通してどのような知識・能力の習得が期待されるかについて国際的な共通認識が醸成されてきているため、更なる検討と経験を重ねれば、妥当性と信頼性のある国際的な学習成果アセスメントを実施することは可能であるという結論が導かれた。また、学問分野の専門家が国内外より集い、コンピテンス枠組みの構築、テスト問題と採点ルーブリックの作成、テスト実施と採点といった一連の活動に取り組み、経験を共有できたこと自体が、大学教育のアウトカムについての共通理解を構築する上で、極めて重要なプロセスであったことが確認された。

こうした知見に基づいて、国立教育政策研究所では平成 26 年度より、機械工学分野でテスト問題バンクの構築に取り組んでいる。前述したとおり、工学分野では学習到達目標が日本学術会議の分野別参照基準や JABEE 認定基準として示されており、大学教育のアウトカムについての共通理解形成に向けて一定の経験が既に蓄積されている。しかしながら、工学分野でも大学教育の自律性と多様性を尊重する立場から、学習到達目標についての記述は抽象的なものに留められており、水準を含む具体的な形では示されていない。そうした中でテスト問題バンクでは、テスト問題作成というアプローチで、工学分野の学習到達目標（学士課程修了相当）に関する実質的な共通理解を形成することを目指している。さらに、作成したテスト問題を海外の大学教員と共有することを通して、国際通用性を確保することも目指している。

平成 26 年度には、18 大学の教員 29 人の共同作業を通して「技術者のように考える力」を問う記述式問題 6 問、「基礎的な知識・技能の習得」を問う多肢選択式問題 45 問を作成し、その過程でコンピテンス枠組みと水準について合意を形成することに成功した。平成 27 年度には、全国 3 拠点で新たな大学教員の参画を呼び掛け、活動のモデル化に取り組んでいる。本取組は、大学教育のアウトカムに係るエキスパート・ジャッジメントを鍛え、国際的合意を形成することに向けた大学教員の主体的取組として、国内外の工学教育はもとより、大学教育全体にとって重要な示唆を提供することが期待される。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/150709_fukahori/

○ 2015 年 7 月 23 日 第 76 回客員教授セミナー

「経済成長と社会的公正実現に寄与する高等教育－インドの場合－」



講 師：ジョシ マヘンドラ キショア

(インド マハラジャ クリシュナクマリシンバーヴナガル大学経済学部 教授)

日 時：2015 年 7 月 23 日 16:30～18:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館 5 階 アクティブラーニングスタジオ

概 要：インドの高等教育の規模は大きく、機関数は世界第 1 位（大学約 700 校、カレッジ約 3.6 万校）学生数は約 2,960 万人で第 2 位である。過去 20 年間に私立を中心に規模拡大を続けてきたが、高等教育在学率は 21.2% で依然低い水準にある。社会的公正の確保に向けて多様な政策がとられているが、高等教育機会はジェンダー、人種、経済条件等によって格差がある。本セミナーでは、高等教育のガバナンスや社会的公正問題に言及しつつ、インドの高等教育の現状と今後の展開について明らかにする。

講演要旨

高等教育は今や、経済成長を促進する主要な手段として広く認知されています。インドの高等教育機関はこの30年間に急成長を遂げ、その機関数は世界一、学生数は世界2位にまでなりました。独立以降の1950/51年から2013/14年にかけて、カレッジの数は695校から36671校に増え、大学は30校から712校に増えています。とくに飛躍的な増加がみられたのは、2000年以降のことです。カレッジの2000/01年から2013/14年の年平均成長率は8.4%でした。またオンライン教育を提供する機関が2000/01年の74校から2012/13年の197校へ増えています。このような機関数の増加は、多くの私立大学が設置されたことによるものです。州認可の私立大学は2000/01年には2校でしたが、2013/14年には165校となり年平均成長率は40.4%でした。

在学学生数も増加しました。1950/51年の40万人から、2005/06年に1430万人、2012/13年に2960万人となっています。該当世代の在学率は1950/51年の0.7%から21.2%に上昇していますが、先進国に比べれば低い状況です。また変化のスピードは概して遅く、直近の10年ほどだけが例外でした。この在学率増加の背景には、個人的および社会的な需要の高まりとともに、中等後非高等教育から高等教育への移行率の増加があります。ここでも私学における在学学生数の増加がみられます。政府補助を受けない私立大学に在籍する学生の割合は2001年の32.9%から2013年の59.4%へと上昇しました。学部学生の専攻分野は人文社会科学系に大きく偏っています。

高等教育へのアクセスの公平性は、インドにおける重要な問題です。インド社会は、経済格差、旧カースト、宗教、地域、性差などによって幾重にも階層化されています。そのなかで原住民と不可触民が社会的に恵まれない二大グループであり、高等教育へのアクセスという点でもこの2グループは国の平均から大きく外れています。また都市にくらべて地方の在学率が低く、とくに低いのは地方のムスリムです。アファーマティブアクションや財政支援など公正を実現するためのさまざまな政府介入は期待されるほどの効果があがらず、性、民族、経済状況、地域によって、アクセスの不均衡が残っています。

現在のインドの高等教育が直面している課題は、質、公正、効率、財政です。質とアクセスのバランスを実現する適切なメカニズムが必要です。そのなかには私立大学を統制する明示的な政策と有効なガバナンスも含まれます。これらの内容を取り上げた政府の計画「新教育政策」により、インドの高等教育の改善が適切に計画実行されることが、社会および大学関係者から期待されているところです。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/150723_joshi/

○ 2015年11月19日 第77回客員教授セミナー

「大学のガバナンスと教育改革」



講 師：吉武 博通（筑波大学大学院ビジネス科学研究科 教授）

日 時：2015年11月19日 16:00～18:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概 要：次大学においてガバナンスの確立が求められる背景を概観した上で、ここでいう「ガバナンス」が何を意味するのかを企業統治との比較などを通して考察する。また、大学が教育改革を進める上で組織上如何なる問題があるかについて、大学の組織特性を踏まえて整理した上で、教育改革が実効性を高めるためのガバナンスの在り方について、マネジメントやリーダーシップとの関係も明らかにしつつ検討する。

講演要旨

グローバル化への対応、イノベーションの創出、地方創生など大学への期待が高まる一方で、大学は社会の変化に遅れており、改革を加速する必要があるとの厳しい見方も根強い。そのことがガバナンス改革を促し、教授会の役割の明確化などを中心とする2015年4月施行の学校教育法等の改正につながる。特に強調されるのは学長のリーダーシップである。

「ガバナンス」という用語が中央教育審議会答申などに正式に登場するのはごく最近のことであるが、「大学の制度、組織が時代おくれであることが最も深刻な問題」（永井道雄『大学の可能性』中央公論社、1969）との認識は今に始まったものではない。さらに遡る1963年1月の中央教育審議会『大学教育の改善について（答申）』において「学長は、大学の管理運営の総括的な責任者である。したがって、大学全体の管理運営に関しては、責任をもって処理すべきものである。」との指摘もなされている。

永井（1969）は大学紛争の時代に書かれたものであり、大学を取り巻く環境はその時々で異なるが、管理運営の在り方が半世紀にわたり問われ続けてきたことは、この問題が大学改革の核心部分であることを象徴している。

大学は、個々に自立した教員を構成員とする「共同体的組織」として発展し、それを補完する形で「経営体的組織」を発達させてきたという経緯がある。大学の機能が高度化・複雑化し、後者の重要性が増しつつある中で、二つの要素を組み合わせる機関として最適な組織設計を行うための解を見出せていない点に、改革を難しくしてきた根本原因があると考えられる。

特に、大学教育の改革にあたっては、教員個々の興味・関心に基礎を置く研究とそれを背景にした教育というこれまでの考え方を重視しながら、同時に、大学の理念や目標を3つのポリシーに展開し、カ

リキュラムを構造化した上で、教員個々の教育改善を促すという組織的取り組みを強化していく必要がある。この二つの要請をどう両立させるかに教育改革の成否がかかっている。

つまり、ガバナンス改革を大学の教育機能の高度化につなげるためには、学長のリーダーシップの強化とともに、「組織設計」が極めて重要な課題となる。また、組織を機能させるのは人材であり、教員と職員が様々な場面でリーダーシップを発揮し、組織をより良き方向に変えていくことが重要である。リーダーシップを育む組織文化が根付いてこそ、大学を持続的発展の軌道にのせることができる。そう考えるべきではなからうか。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/151119_yoshitake/

○2016年3月3日 第78回客員教授セミナー

「インストラクショナルデザインの観点を採用したアクティブラーニング」



講師：向後 千春（早稲田大学人間科学学術院 教授）

日時：2016年3月3日 16:30～18:30

場所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概要：インストラクショナルデザインは初めから学習者中心のアクティブラーニングを目指していた。学習者検証の原則を取る限り、教えっぱなしの教育形態は最初から採用することはできなかった。本セミナーでは、10人以下の個別指導、100人以下のグループワーク、1000人単位のオンラインコースのそれぞれの教育形態におけるアクティブラーニングの設計とその実践についてインストラクショナルデザインに基づいて検討する。

講演要旨

1. 序論:インストラクショナルデザインとアクティブラーニング

インストラクショナルデザインは初めから学習者中心のアクティブラーニングを目指していた。学習者検証の原則を取る限り、教えっぱなしの教育形態は最初から採用することはできなかった。本セミナーでは、10人以下の個別指導、100人以下のグループワーク、1000人単位のオンラインコースのそれぞれの教育形態におけるアクティブラーニングの設計とその実践についてインストラクショナルデザインに基づいて検討する。

2. 多様なコース形態でのアクティブ化

コース形態を3種類、(1)1000人単位のオンラインコース、(2)100人以下のクラス、(3)10人以下の個別指導、に分類した上で、それぞれのアクティブ化の方法を提案する。

2.1 1000人単位のオンラインコースのアクティブ化

- (1) クイズによる自己効力感：自動採点のクイズを活用することで、即時フィードバックが可能になり、自己効力感を高め、自己調整力を伸ばす。
- (2) 文章課題の相互採点：相互採点のために他者の文章を読むことで、多様な視点と価値観を獲得することができるようになる。
- (3) Q&A も評価する：自発的な質問と回答の投稿を評価することにより、学習内容を拡張・展開することを促進できる。

2.2 100人以下のクラスのアクティブ化

- (1) グループワークを構造化する：グループワークの課題を細分化し、細かく時間管理することによって、活動は活性化される。
- (2) グループの偶然性を活用する：Levin の感受性訓練、Rogers のエンカウンターグループで着目された自己開示、他者受容の能力をつける。
- (3) eラーニングの反転授業として：eラーニングを補完し、さらにその動機づけを高めるために反転授業を実施する。

2.3 10人以下の個別指導のアクティブ化

- (1) 標準化できるものはゼミグラムに：標準化された指導内容は個別にしなくてもすむように、ドキュメントやビデオにまとめ、蓄積し、適宜活用する。
- (2) 個別観察して良いところを伸ばす：グループの中においても個別観察をして、その人の良いところを伸ばし、弱いところを克服するようなプログラムを用意する。
- (3) 自己調整力を伸ばせるよう支援：放置することなく、その人にあったタスクを出し、常にゴールを目指すように支援する。

3. 結論:インストラクショナルデザインによる設計とコンサルティング能力

あらゆる教育場面でのアクティブ化にはインストラクショナルデザインによる設計と教員のコンサルティング能力が必要となるだろう。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/160303_kogo/

○2016年3月10日 第79回客員教授セミナー
「中国における大学生の学習行動と大学の学習支援」



講師：竇心浩（上海外国語大学日本文化経済学院 副教授）

日時：2016年3月10日 15:00～17:00

場所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概要：中国では、高等教育が大衆化時代を迎えており、学生の学力低下がしばしば指摘されている。政府は学生の学習支援方策を実施しているが、それらは主に成績のよい学生の学業を促進することに主眼があり、学業不振の学生の支援には必ずしもつながっていない。本セミナーでは、政府の学業支援方策の内容と特徴を検討する。また、学生の多様な学習行動に対応する学習支援システムの構築をめぐる動向を紹介する。

講演要旨

1990年代中頃以来、中国の高等教育は速いスピードで拡大しつつある。高等教育進学率は1992年の3.9%から2015年の40%まで上昇し、大学入学者数も75万(1992年)人から700万人(2015年)に増えた。こうしたドラスティックな量的拡大の下、大学生の質的变化も現れている。学力の低下、入学目的の多様化など学生側の問題が目立ち、大学側が対応に苦慮している。一方、中国社会は世界規模の情報化とグローバル化の流れに巻き込まれ、より高度な知識と技能を身につけた人材の育成を大学に求めている。それゆえ、高等教育の大衆化時代において、高等教育の質保証が中国政府と大学の直面する最重要課題の一つとなっている。

2015年10月から11月にかけて上海に立地する四大学で行った調査では、大学生の学習活動におけるいくつかの問題が明らかになった。学生全体を見れば、平均授業時間(週26.5時間)に比べ、授業外の自律的学習時間(週16.5時間)は非常に少ない。特に、学業達成度の低い学生ほど自律的学習時間が少ない。また、学生の学習意識にも分化現象が目立つ。35%の学生は授業内容が役に立たないと思い、授業内容が役に立つと思う者でも勉強の具体的目的が分からない学生も25.8%に及んでいる。これらの学生は比較的勉強時間が短く、学業達成度も低い。高等教育の質を保証するために、大学側は大学生の学習活動に関与して、学習支援を積極的に行うことが必要になっている。

近年、中国政府は高等教育の質的向上を重要視して、指導教員制度の導入、モデル授業の充実、学生研究プロジェクトの展開など、多様な学習支援策を講じている。これらは「適応能力確保」、「専門知識習得」、「応用能力向上」という三つの狙いがあると見られるが、政府が力を入れているのは専門知識習得と応用能力向上であり、特に後者への重視が顕著である。

一方、大多数の学生は学習支援の必要を感じているが、新入生向けの導入教育を除き、指導員や指導教員の指導、授業ホームページなど多くの支援措置に関しては、あまり評価していない。学業達成度の高い学生ほど諸種の支援をよく利用していることも分かった。さらに、学生の求める支援には学年による差異がある。中国型学習支援は、学業達成度の高い学生の能力の伸長を重視する一方、低い学生への支援には重点を置かない。そのため、学生の二極分化に拍車をかけている。

以上のように、高等教育の質保証に関連する政府の諸措置と教育現場の実態と間に、明らかにミスマッチが存在している。政府は資源の投入と教育機能の強化によって、高等教育の質の向上を目指しているが、学習支援の主な担い手である教員の多くは負担増を危惧して、支援活動に消極的である。一方、大学院生や学生には、自らの能力を生かしたピアサポートが期待されるが、実際にはあまり行われていない。また、ほとんどの大学では、学習支援センターのような専門的組織がなく、大学内部で学習支援の企画、調整、評価などを行うことは難しい。そのため、学習支援の効果を保証できない。こうした問題を解決するには、大衆化高等教育に対する正確な認識と、学習支援に関するグランドデザインをもつことが不可欠である。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/160310_dou/

◎その他の主催・共催セミナー

○大学教務実践研究会ワークショップ

「事例で学ぶ教員免許業務」

小野 勝士（龍谷大学 文学部教務課）

主 催：大学教務実践研究会・高等教育研究センター

日 時：2015年7月3日（金） 13:00～16:00

場 所：環境総合館 1F レクチャーホール

概 要：教員免許業務は、教務において取扱いが難しく問題も発生しやすい業務とされています。正しく教員免許業務を進めるには、学生への履修指導等のために自大学のカリキュラムだけではなく、カリキュラム構築の拠り所となる教育職員免許法や教職課程認定基準等について正しく理解しておく必要があります。本ワークショップでは、カリキュラム変更時に教員免許業務の現場で実際にあった事例を紹介しながら、カリキュラム変更時に必要となる文部科学省への届出書類作成のポイントをワークショップ形式で学びます。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/150703_ono/

○GSID セミナー

「ヨーロッパの高等教育研究－国際的特徴－」

ウルリッヒ・タイヒラー（カッセル大学 名誉教授）

主 催：大学院国際開発研究科

共 催：高等教育研究センター

日 時：2015年10月14日（水） 10:30～12:00

場 所：名古屋大学大学院国際開発研究科 8階第一会議室

概 要：タイヒラー教授は、ヨーロッパの高等教育研究の国際的開発に大きな貢献をすると同時に、欧州と日本、そして途上国を含めた世界の高等教育の国際化・国際連携に大きな尽力をされてきました。今回は、欧州の高等教育研究の展開と最新動向をお話いただきます。会場のみなさまとは、日本や世界の高等教育研究の展開との比較を中心に、議論ができればよいと考えています。タイヒラー教授の略歴は、下記のサイトをご覧ください。

<https://www.uni-kassel.de/einrichtungen/en/incher/team/teichler-ulrich.html>

※このセミナーは英語で行います（日本語による通訳付）。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/151014_teichler/

○大学教務実践研究会第3回大会

主 催：大学教務実践研究会、高等教育研究センター

共 催：愛知みずほ大学・大学院、愛知みずほ大学短期大学部

日 時：2015年12月5日（土） 10:00～16:00

場 所：愛知みずほ大学、愛知みずほ大学短期大学部 1号館

概 要：大学教務実践研究会は、教務の現場における事例を持ち寄り、それを整理した上で実践的な知識まで高めることを目的に活動しています。

これまでの大会・ワークショップで実施したアンケートの結果を踏まえ、今回は「障害」「単位認定

(教職)「職員能力開発」をテーマとした3つの分科会を設け、現場で課題に直面している教職員が集い、実践的な知識を共有します。その中でも「障害のある学生への支援」では、障害者差別解消法の施行を目前に控え、喫緊の課題であることから、基調講演も設定しております。学生が輝く大学・短大・高専づくりに日々取組まれている教職員の方々のご参加をお待ちしております。

プログラム

9:30 受付

10:00 大会企画説明

10:10 講演 安田 道子 氏 (名古屋大学 名誉教授)

「発達障害のある学生の特徴と支援」

11:30 ポスター発表&昼食

13:00 分科会

①特別な支援が必要な学生への対応について

②入学前の既修得単位の認定実務(教職関係の単位認定事例をもとに)

③教務・学生支援部門における職員育成・業務改善(若手～中堅職員向けワークショップ)

15:30 全体討議

16:00 閉会

講演概要

講演 安田 道子 氏 (名古屋大学)

「発達障害のある学生の特徴と支援」

- ・発達障害の概要
- ・大学生に多い発達障害の特徴
- ・発達障害は大学で顕在化しやすい
- ・発達障害のある学生への支援
- ・合理的配慮とは何か
- ・教育的配慮・指導、専門的相談、合理的配慮が必要

分科会概要

分科会①

コーディネーター 水谷 早人 (日本福祉大学)

「特別な支援が必要な学生への対応について」

(1) 分科会の目的

①障害者差別解消法(2013)を受けての「合理的配慮の義務化」(2016)を前に、大学等高等教育機関に課せられた多くの課題を整理し、参加者間で認識を共有する。

②いわゆる「合理的配慮」の具体的内容に関し、参加大学の置かれた状況に応じた具体的な支援内容・方法について意見交換・事例交流を進め、今後の大学における支援方法の改善ならびに支援体制整備のビジョンイメージを豊かにする。

(2) 問題の所在

①いわゆる「目に見えない障害を持った学生」、発達障害およびその疑いのある学生と関わる際に感じる困難度を問う調査結果によれば、職員では「ちょっとしたことで感情的になることが多い学生 (92.3%)」、「他者とトラブルを起こすことが多い学生 (89.7%)」、「他者の嫌がることを言うてしまうことが多い学生 (84.6%)」、「約束の時間を守れないことが多い学生 (84.6%)」というものであった(小池ほか, 2012)。身体障害学生等の「目に見える障害を持った学生」に比べ、診断書がなく、また当事者本人に障害の自覚がなかったり、自ら支援を求めない場合があることが、支援の内容・方法において困難さをもたらしている。

②発達障害やその他の障害については、個々の特性や支援ニーズが多様であり、本人の障害をオープンにするのかしないのか、ということも大きな課題となることもある。そのため組織として支援システムを作っていくことが難しいという状況にあることが多い。また、学生相談室やソーシャルワーカー室などで、個別の専門的支援を受けながら、学習面、生活面、就労・キャリア指導、保護者・友人および地域の支援機関との連携など、あらゆる支援が必要となることも多く、こうした多面的支援を誰が、どのような役割を担って進めていくか、という課題が存在している。

(3) 進め方

13:00~13:30 「開催趣旨説明」 水谷 早人 (大学教務実践研究会・日本福祉大学)

日本福祉大学キャンパス・ソーシャルワーカー 澤田 佳代 氏

「日本福祉大学における取り組みの概要」および事例紹介とグループワークでの
論点提示

13:40~14:30 グループワーク 事例検討

14:30~15:00 グループ発表とコメント

15:10~15:30 まとめと総括

15:30 全体討議会場へ移動

分科会②

コーディネーター 小野 勝士 (龍谷大学)

「入学前の既修得単位の認定実務～教職関係の単位認定事例をもとに～」

(1) 分科会の目的

- ①教職関係単位の認定等についての法令および解釈事例について参加者間で認識を共有する。
- ②認定手続きについては、法令および解釈事例に基づき、大学の裁量を加えながら行うこととなる。各大学の手続き方法について意見交換・事例交流を進め、新年度の認定実務等履修指導に役立てる機会とする。

(2) 問題の所在

編転入生の単位認定については、入学者の出身学科等の課程認定の有無や認定状況によっておよそ11の対応パターンに分けることができる。そのパターンの中においても適用法令が複数あり、それに大学の裁量の余地を加えると実に多様なパターンが存在する。

法令の解釈事例がたくさんあることから、法令の解釈を誤ると免許状申請の局面において申請を受け付けられないことが生じる。

上記のとおり多様なパターンと解釈事例を体系立てて整理したものが全国的にない状況がこのテーマの理解を複雑にしている。

(3) 進め方

今回の分科会においては、龍谷大学文学部の編転入生の受け入れ事例をもとに、入学前・入学時・履修登録の各段階における対応について、法令の適用と大学の裁量部分について説明する。

各段階において存在する課題について共有し、スムーズに入学後の履修を開始するにはどのようにすればよいのか、適宜意見交換を行いながら進めていく。

13:00～13:10 アイスブレイク (各グループで)

所属・氏名・本日のテーマ等で最も苦勞したことを1つ、グループ内で各自紹介。

13:10～14:30 事例報告 (適宜質疑応答)

14:30～14:45 休憩

14:45～15:05 グループ内での意見交換

15:05～15:30 グループ内での意見交換を受けて報告者及び参加者との質疑応答

15:30 全体討議会場へ移動

分科会③

コーディネーター 宮林 常崇 (首都大学東京)

「教務・学生支援部門における職員育成・業務改善 (若手～中堅職員向けワークショップ)」

(1) 分科会の目的

①参加者それぞれの職場における課題や改善事例を共有・整理することで、日常業務に活かすヒントを得る。併せて、気軽に照会できる人的ネットワークを構築する。

②教務・学生支援部門における職員育成・業務改善の障壁を整理することで、本研究会の今後の活動として実現可能かつ効果的な現場支援の具体策を模索する。

(2) 問題の所在

教務・学生支援部門における事務は担当者の裁量が大きく、学内構成員の多様性を尊重する必要があることから、マニュアル化などによる画一的な対応は難しい。その結果、担当者によってサービスレベルが異なるだけでなく、知識・経験不足に起因した事務ミスも後を絶たない。

現場の混乱を緩和するためには、担当者一人ひとりが自ら力量を高める機会をつくるなどの努力に期待するしかないのが実情である。

これまで様々な研修会が企画され、「大学の教務 Q&A」など様々なテキストも刊行されてきた。これらをタイミングよく活用することで混乱は緩和されるはずなのだが、出口が見出せない現場はまだまだ数多い。

(3) 進め方

13:00～13:30 開催趣旨説明・論点整理・アイスブレイク 宮林 常崇 (首都大学東京)

13:30～13:45 事例報告

「教務業務担当のミッションステートメント」について

深野 毅 氏 (立教大学)

13:45～15:05 ワークショップ

「教務・学生支援部門スタッフの『あるべき姿』を見つける」

15:05～15:30 グループ発表とコメント

15:30 全体討議会場へ移動

ポスターセッション

P1

「学生と職員による協働イベント「キャンドルナイト」について」

城戸直也/榎並基仁/神谷聡子/山元隆広/西原健太/小林あずみ/福井純平（追手門学院大学）

発表では、2010 年度より本学が実施している学生と職員による協働イベント「追大キャンドルナイト」の成果や課題について、とりわけ本イベントへ参加したことによる学生の変化に焦点をあて報告する。

追大キャンドルナイトとは、校舎の電気を消しロウソクの灯りだけで、一日のひと時を過ごすイベントであり、学生へ「居場所」を提供したいという職員の想いから始まったものである。「学生の居場所を作ること」に加えて、「学生の主体性を育むこと」、「学生の愛校心を高めること」をも目的に掲げ、学生スタッフと職員有志が協働し、キャンドルナイト当日へ向けて、企画・運営等を行った結果が、学生スタッフへどのような変化をもたらしたのか。これまでの5年間の取り組みを振り返りながら、キャンドルナイトの学生スタッフへのアンケートやヒアリングからみえた成果や課題についてまとめる。

P2

「オペレーションズ・リサーチによる教務サービス改善構想について」

川島香織（愛知県立大学）

学生への教務サービスを充実させるために、教務セクションには知的生産性の向上が求められている。知的生産性の向上には「時間努力」、「人海戦術」という従来型の努力ではなく、オペレーションズ・リサーチ、サービスサイエンスや知的生産テクノロジーに基づく「スマート努力」という意識改革が必要である。

愛知県立大学では、平成26年3月に学務課と学生支援課の執務室および掲示板を改修工事し、ハード面での学生サービス向上を図るとともに、「学生本位」のサービス提供を目標に掲げ、1. 迅速な窓口対応、2. 安心感のある学生対応、3. 清潔感のあるカウンターの維持、の3点を職員が徹底することで、ソフト面での改善を行った。しかし、ハード面・ソフト面ともに改善の基準としてきたのは、学務課職員の「カンと経験」であり、とりわけ改修工事費捻出の根拠としては裏付けに乏しいものであったため、今後はオペレーションズ・リサーチ、サービスサイエンスという科学的な根拠に基づいた視点を加えることにより、より確実なサービス向上を見込める改善提案方法として紹介する。

P3

「本学の時間割編成システムの特徴と導入の効果」

丸山毅（東京家政大学）

大学の時間割編成は各大学固有の複雑な制約条件（特に教員からの様々な要望事項）があり、汎用的にはならない業務である。それは汎用的な時間割編成システムの数が少ないという現状がそれを語っているとも思われる。また、時間割業務に精通した職員がかなりの労力を費やして、編成作業だけでなく時間割表冊子作成や教務システムへのデータ移行などの業務を遂行しているというのが各大学の実状ではないであろうか。

本学では、視覚的に編成作業を効率的に行えるようにすることや、時間割表を冊子印刷することなく時間割編成システムのデータをWEB経由で学生に表示することなどをキーポイントして新たな時

間割編成システムを導入した。本学の時間割編成システムの特徴を、特に効率化できた点を中心として発表したい。

P4

「公立大学職員による、公立大学職員のためのネットワークが生み出したもの」

玉井大輔（滋賀県立大学）、藤根卓也（岩手県立大学）

宮林常崇（首都大学東京）、手塚智之（山梨県立大学）

これまで様々な研究会や勉強会が存在しているが、公立大学職員が主役になって活動しているものはあまりなかった。公立ならではの事情に応じた情報交換や自己研鑽できる場所が必要であると感じ、公立大学職員ネットワークを平成 25 年 4 月に発足し、現在 45 大学・機関の職員 153 名（平成 27 年 10 月現在）が参加している。各メンバーの情報（担当業務、地域の情報など）の交流を図ることを目的とした『メンバー名簿』の作成を軸に、情報発信ツールとしての『facepaper』（メールマガジン）、メンバー同士の Face to Face での交流の機会『キャンパス見学会』を有機的に連動させながら、全国各地の公立大学職員の「つながり」を築いてきた。

これまで 7 大学で開催した『キャンパス見学会』はその後にもたらした波及効果も大きい。例えば、①公立大学職員に必須の知識を公立大学職員自らがとりまとめ業務に活かせるようにした『OJT ワークシート』の作成、②開催校における SD 活動のきっかけづくり、③公立大学学生ネットワークとの連携などが、すでに目に見える成果として生まれている。

主催 大学教務実践研究会、名古屋大学高等教育研究センター
共催 愛知みずほ大学・大学院、愛知みずほ大学短期大学部

大学教務実践研究会第3回大会

概要 大学教務実践研究会は、教務の現場における事例を持ち寄り、それを整理した上で実践的な知識まで高めることを目的に活動しています。

これまでの大会・ワークショップで実施したアンケートの結果を踏まえ、今回は「障害」「単位認定（教職）」「職員能力開発」をテーマとした3つの分科会を設け、現場で課題に直面している教職員が集い、実践的な知識を共有します。その中でも「障害のある学生への支援」では、障害者差別解消法の施行を目前に控え、喫緊の課題であることから、基調講演も設定しております。学生が輝く大学・短大・高专づくりに日々取組まれている教職員の方々のご参加をお待ちしております。

プログラム 9:30 受付
10:00 大会企画説明
10:10 講演 安田 道子 氏（名古屋大学 名誉教授）
「発達障害のある学生の特徴と支援」（仮題）
11:30 ポスター発表&昼食
13:00 分科会（いずれか1つを選択してください。また、分科会のみでの参加はできません。）
①特別な支援が必要な学生への対応について
②入学前の既修得単位の認定実務（教職関係の単位認定事例をもとに）
③教務・学生支援部門における職員育成・業務改善（若手～中堅職員向けワークショップ）
15:30 全体討議
16:00 閉会

2015年12月5日（土） 10:00－16:00

場所：愛知みずほ大学、愛知みずほ大学短期大学部1号館

定員：140名

参加申込み：大学教務実践研究会 HP の「第3回大会申し込み」フォームからお申込み下さい。

<http://kyoumujissen.wix.com/home>

2015年11月20日（金）まで。【10月9日（金）までは会員優先申込期間といたします。】

参加費：1,000円（会員・一般とも） 当日受付でお支払いください。

ポスター発表の募集（発表者は会員を必ず含めてください。）

ポスターは、A0（横 841mm×縦 1189mm）以内、縦型を規定とします。

お申し込みは電子メールにて、kyoumujissen@gmail.com 宛に本文に氏名、所属、発表タイトル（40字以内）、発表要旨（400字程度）、電話番号、メールアドレスを記載して2015年10月30日（金）までにお送りください。ポスター発表の方につきましては、参加費を免除します。

お問合せ：kyoumujissen@gmail.com

CSHE 名古屋大学高等教育研究センター
Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp>

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/151205_fdsd/

○名古屋大学FD セミナー

「英語での講義にどう備えたらよいか？」

John Wojdylo (理学研究科特任 准教授)

主 催：高等教育研究センター、国際教育交流本部

日 時：第1回 2016年3月2日 (水) 14:45~16:15

第2回 2016年3月3日 (木) 14:45~16:15

第3回 2016年3月11日 (金) 14:45~16:15

場 所：ES総合館3階035講義室

対 象：名古屋大学の教員・研究員・非常勤講師

(各回最大15名まで、文系・理系等専門分野は問いません)

概 要：英語による授業を担当されている先生方は、講義の準備をどのようにされているのでしょうか？

初めて担当する際には、どのような点に気をつければよいのでしょうか？

このセミナーでは、学生がより深く理解できる講義を英語で行うために、どのような準備を行えばよいのか、どのように授業を運営すればよいのかを、授業経験が豊富な先生から紹介していただきます。セミナーは、少人数で意見交換する形式です。授業の準備や運営に関するさまざまな質問をする場としてもご活用ください。

内 容：講師による模擬講義

講義準備の方法

参加者との議論

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/160302_fd/

○院生スキルセミナー

「The challenge of academic integrity and the responsibilities of academic citizenship」

ブルース・マクファーレン (英国サザンプトン大学 教授)

主 催：IGER、PhD 登竜門、高等教育研究センター

日 時：2016年3月17日 (木) 13:00~15:00

場 所：理学部南館セミナー室

対 象：本学大学院生

概 要：学術界に求められる倫理や市民性があることを知っていますか？これらは世界的な潮流であり、学術の専門家として多様な人々と協働するための基盤となるものです。本セミナーでは、この分野の第一人者である英国の高等教育学者 Bruce Macfarlane 氏が、これらのトピックスを初歩から解説します。自らの理解を確認しつつ、国際的な活躍に向けて英語表現を知る好い機会にもなるでしょう。

http://iger.bio.nagoya-u.ac.jp/iger_c_skill_k_j.php?skill_id=352

◎名古屋大学新任教員研修プログラム

○平成 27 年度第 1 回名古屋大学新任教員研修プログラム

日 時：2015 年 4 月 8 日（水） 10:00～15:30

場 所：名古屋大学東山キャンパス 野依記念学術交流館 2 階ホール

司 会：夏目 達也（高等教育研究センター 教授）

進 行： 9:30 受付開始

10:00 歓迎のあいさつ

松尾 清一（総長）

10:30 名古屋大学における研究支援

藤巻 朗（副理事 研究力強化担当）

11:00 名古屋大学におけるスーパーグローバル創成事業・学生指導

國枝 秀世（理事 研究・学生担当）

11:55 新任教員ハンドブックの紹介

高等教育研究センター

12:00 昼食休憩

12:30 各教育・研究支援部局によるポスター展示

13:30 留意事項

人事・労務上の制度

堀内 敦（総務部長）

情報セキュリティ

伊藤 義人（副理事 情報セキュリティ担当）

防災対策

飛田 潤（災害対策室長）

学生支援

鈴木 健一（学生相談総合センター 教授）

ハラスメント対策

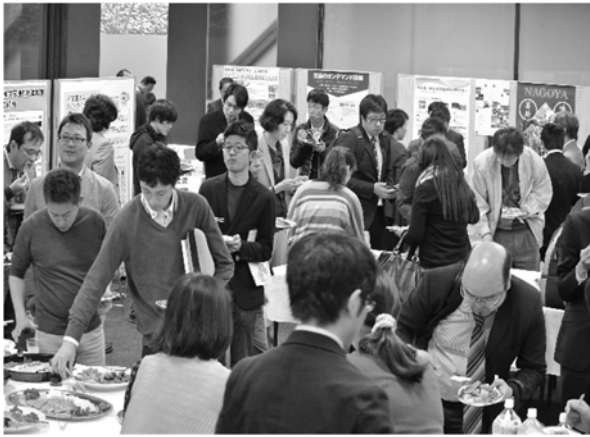
葛 文綺（ハラスメント相談センター 特任講師）

14:30 教育ワークショップ

中島 英博（高等教育研究センター 准教授）

15:20 アンケート用紙記入、回収

15:30 研修終了



○参加者アンケート集計結果

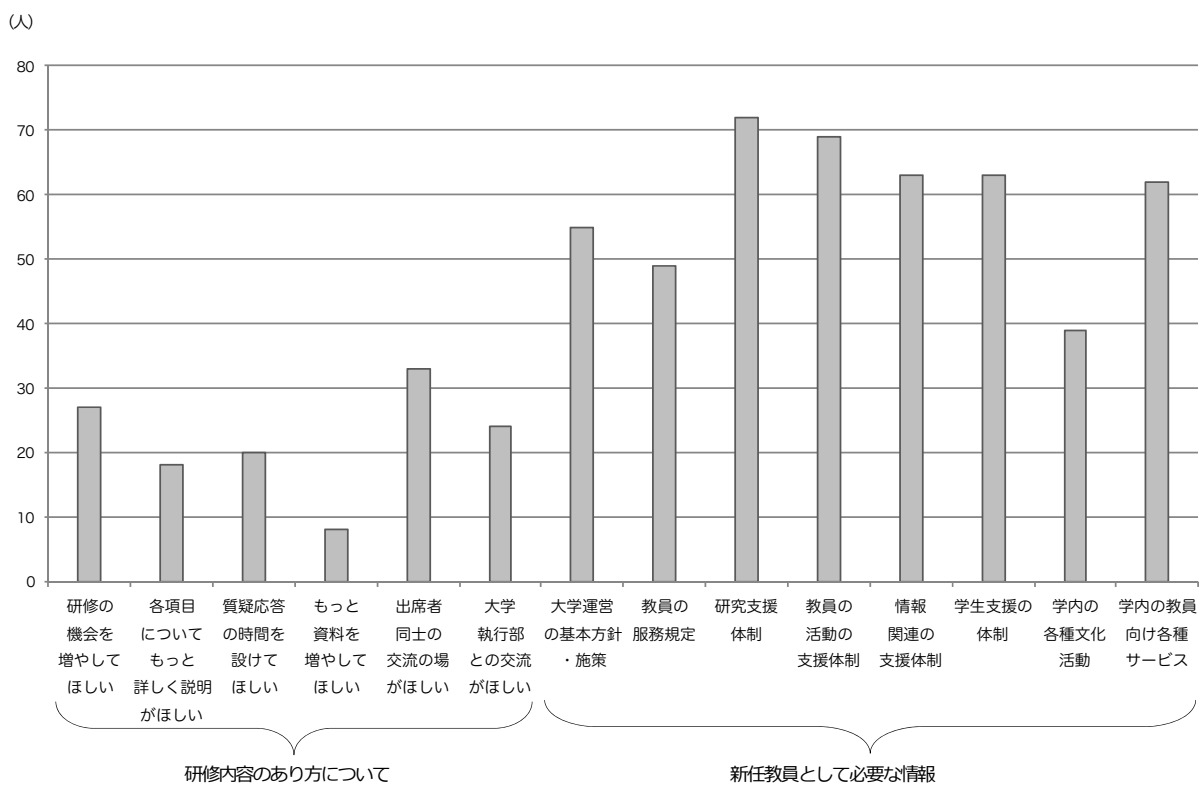
参加者総数 117人

アンケート回答者数 76人 (回答率 65%)

研修の満足度

大いに満足 (22%)	ほぼ満足 (66%)	どちらとも言えない (7%)	やや不満 (5%)	大いに不満 (0%)
-------------	------------	----------------	-----------	------------

研修内容と情報提供への希望



○自由記述

肯定的意見

- ・ 非常に有意義でした。
- ・ 教育ワークショップが大変ためになりました。講義を持つ機会はありませんが、いつかそのような立場になった際には非常に役立つものだと感じました。
- ・ ワークショップの内容が充実しており、勉強になった。研修全般をこのように充実したものにしてほしいです。

- ・ とても参考になりました。12月に着任しましたが、この研修で本当にはじまる気がします。
- ・ ワークショップの内容を授業に活かしていきたいです。ありがとうございました。
- ・ はじめて教職についたため、科研・研究・教育支援について勉強になった。
- ・ 特に要望はありません。ありがとうございました。
- ・ 研修の機会があり、たいへん役に立ちました。ありがとうございました。
- ・ ワークショップが面白かったです。

否定的意見

- ・ 前半は理系教員だけを相手に話しているのかと思える発言があり、とても不愉快に感じた。
- ・ 長い。
- ・ 長時間、質疑応答の時間がなく、連続しており、集中力がとぎれがちだった。
- ・ TGUの話は全学教育FDと重なった。あんなに長時間必要か？
- ・ 教員にとって4月は講義の準備や研究室の立ち上げがあつて非常に多忙。どうしてこんな時に研修を集中させるのか？ 本末転倒である。

今後への要望

- ・ 新任教員ハンドブックについて web でも公開されているのであれば、着任前にその存在がわかるよう案内していただくと先に目を通すことができ助かります。
- ・ 着任後1ヶ月以内に本研修を受けたかったです。(H26年10月1日着任)
- ・ 4月のはじめは会議や授業準備で大変忙しいため、昨年からの教員は3月末や、もしくは全員ゴールデンウィーク明けにやってほしい。
- ・ 配布されたけれど説明のない資料が多い。簡単に説明がほしい。
- ・ 配布資料を電子ファイルでもらいたい。
- ・ 留学生支援に関する情報がほしい。
- ・ 事務手続きに関する研修の機会が必要と思います。
- ・ 項目ごとに研修を実施し、選択して受講できるようにしてほしい。

○平成 27 年度第 2 回名古屋大学新任教員研修プログラム

日 時：2015 年 10 月 22 日（木） 13:30～16:00

場 所：名古屋大学東山キャンパス 野依記念学術交流館 1 階

対象者：平成 27 年 4 月 2 日以降に本学に着任した教員

第 1 回研修（4 月開催）対象者のうち参加できなかった教員

（週 38 時間 45 分勤務する研究員を含む）

目 標：名古屋大学野教員としての各種職務の遂行に必要な基本情報を得る。

授業で困ったときや改善したいときに参考となる情報を得る。

司 会：夏目 達也（高等教育研究センター 教授）

進 行：13:00 受付開始

13:30 歓迎のあいさつ

松尾 清一（総長）

13:45 留意事項（各 10 分：質疑応答込み）

学生支援

古橋 忠晃（学生相談総合センター 准教授）

研究支援

藤巻 朗（副理事 研究力強化担当）

教育の内部質保証と 3 つのポリシー

栗本 英和（教養教育院 教授）

14:45 休憩

15:00 教育ワークショップ

中島 英博（高等教育研究センター 准教授）

15:45 アンケート用紙記入、回収

16:00 研修終了

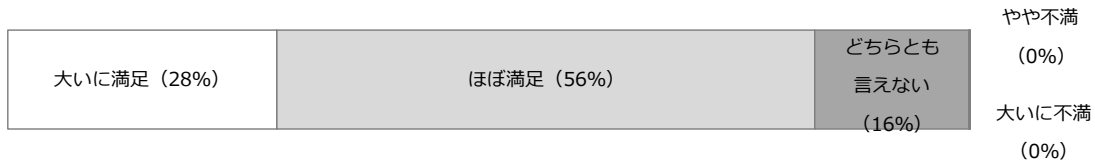


○参加者アンケート集計結果

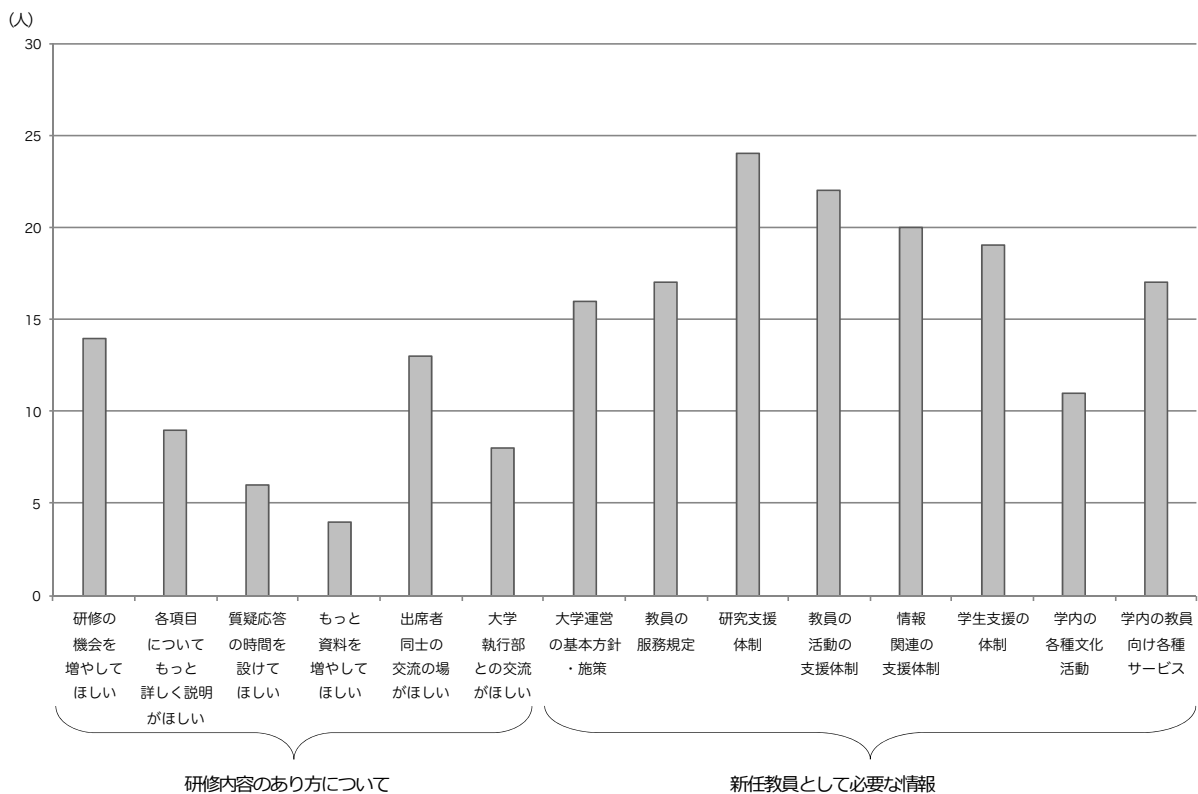
参加者総数 31人

アンケート回答者数 25人 (回答率 81%)

研修の満足度



研修内容と情報提供への希望



○自由記述

- ・ 参加型ワークショップは頭に残りました。
- ・ 教育ワークショップは関心を持ってました。
- ・ 後半のワークショップが参考になった。
- ・ 大変勉強になりました。ありがとうございます。
- ・ 結局、学生のメンタルケアのやりかたがわからないままだった。教員は特に何もせず、ただセンターに行けと言えばいいのか？

◎大学教員準備講座

大学教員準備講座は、将来大学教員の職に就くことを目指す大学院生やポスドクに対して、能力開発の機会を提供するものである。課外セミナーとしての開講を経て、教育発達科学研究科の専門科目「高等教育学研究Ⅰ－大学教員準備講座」として正規開講している。一昨年度から教養教育院において新たに開始された大学院共通科目「大学教員論」としても提供している。

開催概要

日 時：8月3日（月）～8月5日（水）
教 室：文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ
担 当：夏目達也・中島英博・齋藤芳子
受講人数：正規履修5名、聴講3名

授業の概要

大学教員になるために必要な知識と技能の獲得をめざし、多面的に大学教員の職務を検討します。受講生の今後のキャリア設計・開発に資するよう、グループワーク等を適宜織り込んで実践的に進めます。

授業の目標

この授業が終了したときに、受講生のみなさんが以下のような知識や能力を身につけることを目標にします。

- 大学の成り立ちや大学教員の職務について理解する。
- 大学という組織で働くために必要な知識、スキルを身につける。
- 多様な考え方や経験で培った事例を尊重し、ともに教え、学び合う雰囲気貢献する。
- 授業で得た知識、スキルをもとに、今後の学修やキャリア設計を進めることができる。

教科書

夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子（2010）『大学教員準備講座』玉川大学出版部

授業の進め方

以下に示す各回の授業内容について、教科書の該当箇所を予習しておいてください。

8月3日（月） 担当：中島 英博

- 第1講 大学教員という職業
- 第2講 授業を設計する
- 第3講 教授法の基礎
- 第4講 学習成果を評価する
- 第5講 マイクロティーチング

8月4日（火） 担当：齋藤 芳子

- 第6講 国際化の中の大学教員

- 第7講 研究のマネジメント
- 第8講 社会サービスに取り組む1
- 第9講 社会サービスに取り組む2
- 第10講 大学教員の倫理
- 8月5日(水) 担当:夏目 達也
- 第11講 書く力をつけさせる
- 第12講 学生のキャリア形成を支援する1
- 第13講 学生のキャリア形成を支援する2
- 第14講 多様な高等教育機関
- 第15講 大学教員のライフコース

◎大学教育改革フォーラム in 東海 2016

大学教育について、近隣の大学関係者が一緒に議論し、連携、連帯を深め、もっと質の高い大学教育をこの地区に実現することを目指して、大学教育改革フォーラム in 東海を開催した。

開催概要

会 場：愛知大学名古屋キャンパス

日 時：2016年3月12日（土）

12:00～13:00 受付

13:00～14:00 基調講演

14:15～15:45 分科会第Ⅰ部

16:00～17:30 分科会第Ⅱ部

17:30～18:30 ポスターセッション

参加費：2,000円

主 催：大学教育改革フォーラム in 東海 2016 実行委員会

URL：<http://tokai-forum.jp/>

○基調講演

「高校と大学の双方が信頼できる高大接続のあり方」

大塚 雄作（独立行政法人大学入試センター試験・研究統括官／教授）

○分科会第Ⅰ部

分科会Ⅰ「今、大学の中で職員は何をなすべきか

—大学が変革を求められる中、変革を推進する職員像を模索して—」

司会：村瀬 隆彦（愛知みずほ大学短期大学部 事務局長）

1. 「その渦を巻き起こす羽ばたきは誰によるか？」

加藤 史征（名古屋大学研究協力部社会連携課 係長）

2. 「学生の成長のための大学改革」

辰巳 早苗（追手門学院大学理事長・学長室大学事務課 課長）

3. 「優秀な職員は、大学の価値を極大化するか？」

大津 正知（九州大学学務部学務企画課 学務企画専門員）

分科会Ⅱ「大学を中心とした有機的地域連携」

司会：舟橋 啓臣（愛知医療学院短期大学 学長）

1. 「地方創生の取り組みと地域連携のあり方」

岡田 善紀（清須市役所企画部企画政策課 企画政策係長）

2. 「地域活性化に向けた企業の役割」

山本 武司（キリンビール名古屋工場 総務広報担当）

3. 「保育者養成と現場連携」

式庄 憲二（桜花学園大学・名古屋短期大学 学長付教育企画部長）

4. 「地域におけるメディアの役割」

福本 英司 (中日新聞稲沢通信部兼一宮総局 記者)

分科会 3 「物理学講義実験から体験学習への発展の可能性を探るーその3」

司会：古澤 彰浩 (名古屋大学教養教育院 講師)

1. 「物理学講義実験とアクティブラーニング」

齋藤 芳子 (名古屋大学高等教育研究センター 助教)

2. 「予習してのぞむ分光実習」

小西 哲郎 (中部大学工学部 教授)

3. 「学生主体型物理学実験と教育効果測定」

千代 勝実 (山形大学基盤教育院 教授)

4. 「空手チョップと力学：空手ボードテスター」

藤田 あき美 (信州大学工学部 講師)

分科会 4 「ラーニングコモンズを活用した学習」

司会：土屋 玲 (南山大学教育・研究事務部 次長)

1. 「愛知学院大学図書館情報センターラーニング・コモンズの現状について」

足立 祐輔 (愛知学院大学図書館情報センター 事務長)

2. 「踏査基礎演習におけるラーニングコモンズの活用事例」

中元 崇智 (中京大学文学部歴史文化学科 准教授)

図書館 1 「大学図書館と地域連携」

司会：中村 直美 (愛知大学図書館事務課 課長)

1. 「大学図書館が地域にできること」

坂口 雅樹 (元明治大学 和泉図書館事務長)

中村 直美 (愛知大学図書館事務課 課長)

2. 「愛知県図書館における東三河コーナー (仮称) の設置」

新海 弘之 (愛知県図書館サービス課人文・地域G 課長補佐)

○分科会第Ⅱ部

分科会 5 「高大接続」

司会：夏目 達也 (名古屋大学高等教育研究センター 教授)

1. 「愛知淑徳大学人間情報学部の数学系科目に関する高大接続の取り組み」

親松 和浩 (愛知淑徳大学人間情報学部 教授)

2. 「高校での学びの変容と高大接続」

羽石 優子 (名城大学附属高等学校教育開発部・社会科 教諭)

分科会 6 「IR と経営改善」

司会：加藤 誠 (東海学園大学 IR 推進部門 担当課長)

1. 「日本福祉大学における IR 機能の構築に向けた到達点と課題」
 笹川 修 (日本福祉大学 IR 推進室 専任研究員)
2. 「中長期目標に掲げるビジョンの実現に向けた IR 活動－見える化 IR の実質化に向けて－」
 鶴田 弘樹 (名城大学 MS-26 推進室・経営本部総合政策部 課長)

分科会 7 「グローバル人材育成」

司会：藤井 玲子 (愛知東邦大学教育企画課 課長)

1. 「大学と学生の特性を活かした国際交流の在り方」
 松崎 久美 (愛知県立大学入試学生支援センター国際交流室 主査)
2. 「「○国人」ではなくひとりの「人」として世界にあるという視野を身につける」
 徳弘 康代 (名古屋大学国際教育交流本部 国際言語センター 特任准教授)
3. 「地域に根ざしたグローバル人材の育成」
 砂山 幸雄 (愛知大学現代中国学部 教授)

分科会 8 「学生が学ぶ授業運営の工夫」

司会：中島 英博 (名古屋大学高等教育研究センター 准教授)

1. 「初年次必須科目として数学と日本語力を学ばせるねらい、方法、課題」
 落合 文洋 (名古屋文理大学基礎教育センター 教授)
2. 「アクティブラーニングの設計と運営～「必要とされる人材」の育成を目指して～」
 小柳津 久美子 (愛知東邦大学経営学部 准教授)

図書館 2 「学生の学びと大学図書館における展示活動」

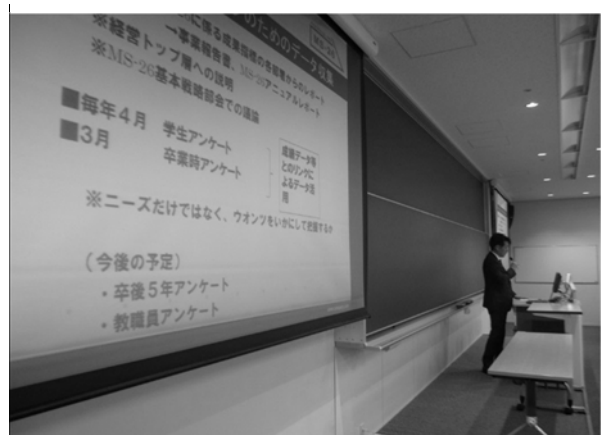
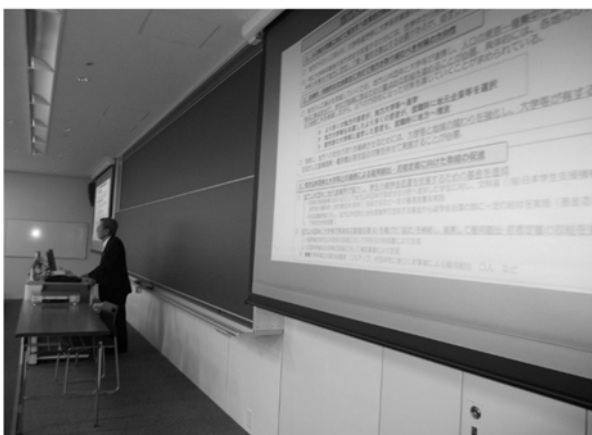
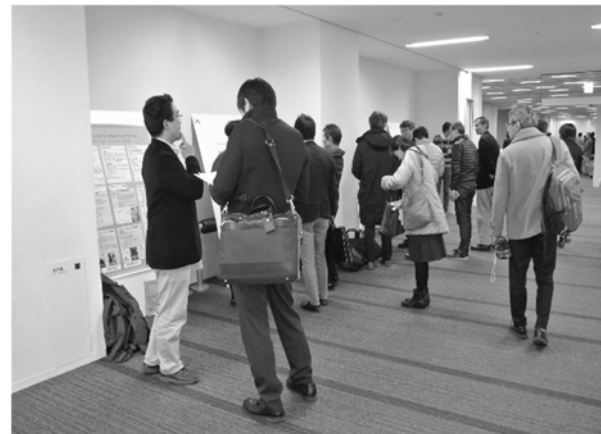
司会：次丸 章 (名古屋大学附属図書館情報サービス課 課長)

1. 「小さな展示スペースからの発信～中部学院大学附属図書館の取組み～」
 岡本 文子 (中部学院大学附属図書館 課長)
2. 「金城学院大学図書館の展示活動～学生ボランティアによる学外展示を中心に～」
 西尾 十和子 (金城学院大学教育研究支援部 図書館担当課長)
3. 「図書館における古典籍の展示活動を通じた教育実践報告」
 吉丸 雄哉 (三重大学人文学部 准教授)

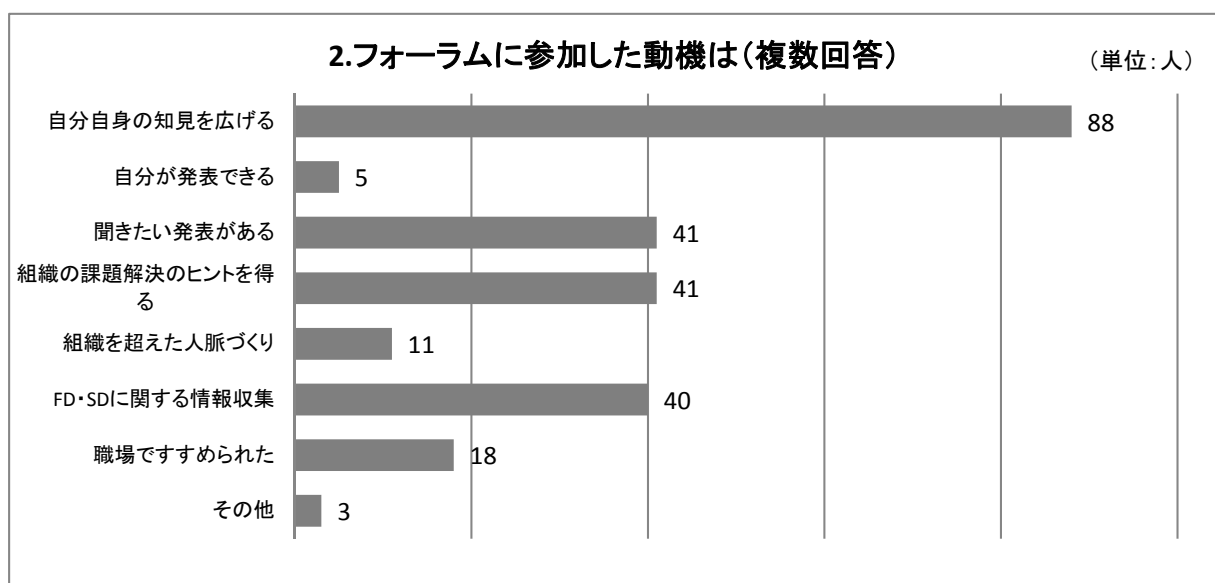
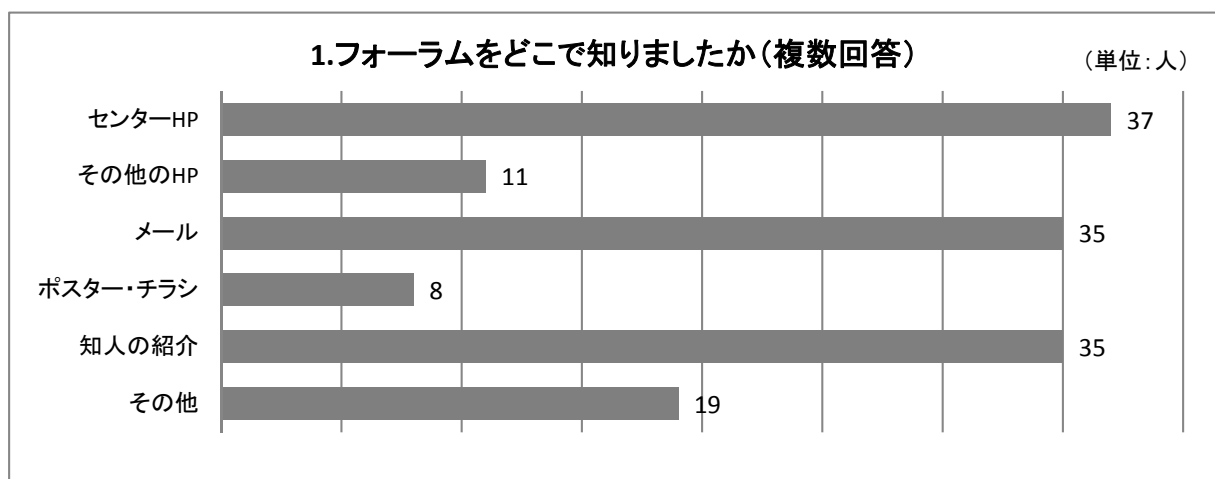
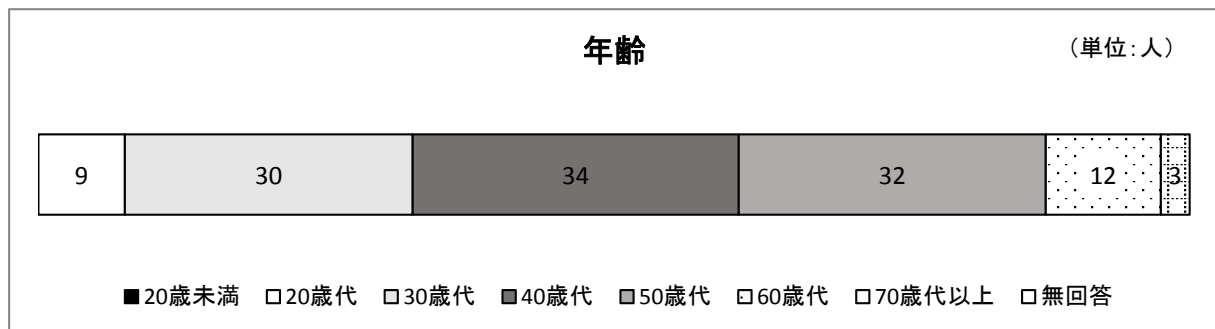
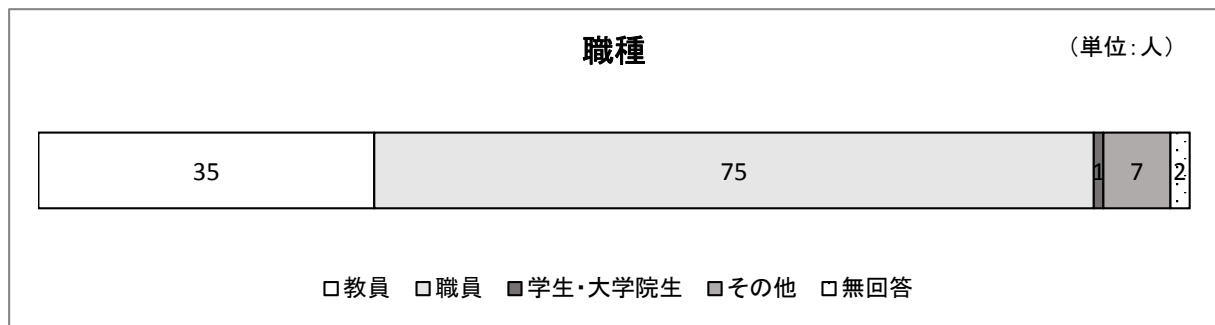
○ポスターセッション

- P1 「名城大好き！」学生を増やす学生ピア・サポート
- P2 教職協働による新たな知の創造～セレンディピティの可能性を高めるための工夫～
- P3 学生による海外留学促進活動：留学前後のピアサポート
- P4 大学生の学習時間についての文献レビュー：量的側面を中心に
- P5 授業・研修でどのように映画を活用できるのか？
- P6 高等学校と短期大学の連携事業における保育基礎講座と保育体験の取組み
- P7 ケプラーの法則と潮汐現象の理解
- P8 IR の実質化とその可能性に関する考察

- P9 大学生の学習行動の変容～国立N大学生への継続調査（3年目）～
- P10 外国人留学生の日本就職に関わる法整備状況について
- P11 初年次教育における学生相談活動を通じた新入生の包括的支援
- P12 学生に活用されるシラバスのあり方
- P13 九州産業大学における高大接続の取組事例
- P14 選ぶ自由のある学習から学生を育てる－「入学前教育」と「初年次教育」での試み－
- P15 認証評価を通じた教育改善の取組状況の分析－第2サイクルにおける改善機能に着目して－
- P16 アクティブラーニングの全学的展開への取り組み



参加者アンケート集計結果 (N=120)



3.分科会1～4・図書館1の内容はあなた自身にとってどうでしたか (単位:人)



役立つ どちらかといえば役立つ どちらかといえば役立たない 役立たない 無回答

4.分科会5～8・図書館2の内容はあなた自身にとってどうでしたか (単位:人)



役立つ どちらかといえば役立つ どちらかといえば役立たない 役立たない 無回答

5.フォーラム運営についてどう感じたか

(単位:人)



よかった どちらかといえばよかった どちらかといえばよくなかった よくなかった 無回答

6.フォーラムは全体的に満足できたか

(単位:人)



満足 どちらかといえば満足 どちらかといえば不満 不満 無回答

7.フォーラムを同僚や部下にすすめたいか

(単位:人)



すすめたい どちらかといえばすすめたい どちらかといえばすすめたくない すすめたくない 無回答

分科会 1～4・図書館 1 の内容はあなた自身にとってどうでしたか？（自由記述）

分科会 1

- ・新しい教員論を知ることが出来た。
- ・職員として求められる資質や能力、また現状や背景がよく理解できた。もう少しそれを実現に向けていくための方法などを含めていただけたらと思った。
- ・「大学を理解する」というのがキーワードだと理解した。
- ・大学職員の一員として大学改革を担っていくにあたり、意識の向上、大学を知ることがいかに大切であるかを再認識できた。
- ・発表者・質問者の発言に、なるほどと思うものがあり、参加して良かった。
- ・「フレンドリー」「信頼できる人間関係」、自分自身も同じことを常に思っていたので、間違った考えでないことに少し自身を持つことが出来た。
- ・大学職員として、大学を良くしようという意志を持ち、学生に何を提供できるのかを考えていかなければならないと感じた。
- ・日々の忙殺さでじっくりと考えることができていなかった「職員」について考える機会となった。
- ・この内容の分科会をもう一つほしい。
- ・内容が浅かった。
- ・教員側からの意見も交えての発表がとても参考になった。
- ・発表者の主体的コメントが多い印象があった。
- ・大津氏の視点は、教員・職員の目線という観点からのプレゼンで非常に興味深いものであった。
- ・立場の異なる方からそれぞれの経験をふまえて示唆をいただけてよかった。
- ・SD の生の声が聞けた。
- ・どこの大学も悩みを抱えていることはとても実感できたが、具体的な例や企業で取組んでいることを教えてほしかった。
- ・国立大学の状況を認識することが出来、勉強になった。考えてもいなかった視点からの職員論の発言は今後役に立つ。
- ・企業側からすると、ここまで低いかという感想です。それが確認できたことが収穫。

分科会 2

- ・企業や行政や新聞記者等の立場からの話が聞けてよかった。時間配分が悪く（少なく）、踏み込んだ議論ができなかった。
- ・組織の課題解決のヒントを得るという意味では役立つものはなかった。自分自身の知見を広げるという意味では多少役立った。時間通り進行していなかった。
- ・発表者の時間配分が悪く、省略されてしまった内容もあり、残念だった。司会者は時間をしっかりとコントロールしてほしい。
- ・連携を始めたばかりで共有が進んでないと感じた。
- ・期待する内容ではなかった。もっと連携事例について詳しく知ることが出来るとよかった。
- ・司会者の色が強く出すぎており、発表者の時間が少なかった。
- ・現在取組んでいる内容とほぼ同じであった。
- ・「役立つ」にチェックしたのは地域貢献ということが大学にとってくだらないことだということを再

確認できたから。

- ・企業の方の話が良かった。
- ・大学目線での地域貢献について聞いたかった。
- ・清洲の説明は不要。せめて変革の長所を知りたかった。時間配分でできていなかった。
- ・メディアの役割の時間がなくなり、もったいない。キリンビールの話の中にはヒントがあった。
- ・大学と自治体の無理やりな連携はやれることも限られ、お互い疲弊するだけ。企業がCSRからCSUという概念に移ったように、大学は新しい「地域貢献」を生み出さねばならないと感じた。

分科会 3

- ・実験について色々知見が得られた。
- ・具体的な体験学習の方法を知ることが出来、勉強になった

図書館 1

- ・図書館の連携など大変参考になった。
- ・地域連携を強く意識している大学の話、また県図書館と地域の取り組みについて聞いてよかった。
- ・積極的な地域連携の例を知ることが出来たよかった。
- ・地域との関係の変化を感じた。
- ・必要性を感じる事が出来た。

分科会 5～8・図書館 2 の内容はあなた自身にとってどうでしたか？（自由記述）

分科会 5

- ・マインドセットについて興味を示した。その育てたい力をどのようにすればよいのかの具体策をもう少し知りたかった。
- ・SGH の発表が参考になった。
- ・高大接続の問題点等が見えてきた。
- ・大学がどこまで変わるのかが課題と認識した。

分科会 6

- ・具体的な取り組みとしてアプローチのイメージが作れた。
- ・非常に具体的な話が聞けた。
- ・取り組みの内容が本学に比較して先行しすぎていて、参考に出来るレベルではなかった。
- ・名城大の内部でもどの程度 IR が理解されているのか気になる。福祉大学 IR はベンチマークも取り入れながら進んでいるようで、大変進んでいると感じた。
- ・目標の設定を行わなければ IR は活用にならないと再認識した。
- ・先頭に立っている大学からの報告はためになった。
- ・IR を一つのツールとして課題に対応できるためにも教職員への周知・認識してもらおうことが大切と思った。
- ・IR を担当する部門の位置づけや業務内容を構築していく上で参考になることが多くあった。
- ・先進的事例により、ヒントを得た。

- ・IRの説明は初めてだったので勉強になった。自身の知識がないため、難しいと感じた。
- ・具体的で内容が深く、大変ためになった。
- ・各大学の具体的事例を説明し、IR活動として目指す目標や成果の発表を聞くことが出来た。
- ・他大学の事例も聞けてよかった。

分科会 7

- ・グローバルと地域の関係を各大学が考えていることがわかった。
- ・恐れず、繋ぐ役をやっていくという新たなヒントをもらった。
- ・グローバル人材とは何かを改めて考えるきっかけになった。
- ・職員による事例発表は伝わりやすくてよい。言いたいことがわかる内容だと印象に残りやすい。
- ・グローバル人材について少し理解できた。
- ・留学生を受け入れる側として話を聞いた。名古屋大学の話は共感する部分もあった。
- ・各登壇者の実務・実践内容がわかり、グローバル化した人材育成や大学・教育を行う苦勞、その苦勞の先に見える成果や次の課題の様子が興味深かった。

分科会 8

- ・具体的事例を知ることが出来た。
- ・説明・内容共にとてもわかりやすく、具体的事例も多く挙げており、沢山のヒントをもらった。今後の研究・教育に対して学びになった。
- ・授業の工夫を参考に自分の授業をチェックでき、よい振り返りになった。
- ・学生と密に接する教員ならではの興味深い話が聞けた。よくある大規模大学の事例でないのがよかった。
- ・現在取組んでいる内容とほぼ同じであった。
- ・具体的で実践的だった。参考にしたい。アプリの活用等慎重に進めていかねばならないと思った。
- ・学生に対する教員側の苦悩であったり、気をつけなければならない部分についての話を聞くことが出来た。事務局側でアクティブラーニング教室を策定する場合でも教員側がいかにして利用するかを考えなければならない。
- ・教員の報告はなかなか聞く機会がないので、参考になった。
- ・先生方の授業を受けた充実度が全く本学とは違い、教員に聞いてもらいたいと思った。
- ・学生にどう「学び」をさせるのか様々な取り組みがあるのだと知った。
- ・実践的内容を学ぶことが出来てよかった。

図書館 2

- ・写真を多用しての説明だったので、具体的でわかりやすかった。
- ・展示のヒントを得ることが出来た。学生とのコラボレーション等参考になる点が多かった。
- ・宝の山に気づかないでいると痛感した。資本を活かさずにはいられない気持ちになった。
- ・学生を使った展示企画についてとても興味を持ち、今後の参考にしたい。
- ・利用者をひきつける展示を考えるヒントを得ることができた。
- ・展示の目的は様々と再認識した。

フォーラムの運営についてどう感じましたか？（自由記述）

- ・個別の分科会の表示がなく、場所がわからなかった。
- ・少し欲張りすぎの感有り。分科会で意見交換があまりできなかった。
- ・さまざまな大学からボランティアスタッフの人が協力する仕組みを作ったことがよかった。
- ・くずかごが少ない。
- ・幅広い内容が用意されていた。
- ・もう少し議論の時間があれば更によい。
- ・スタッフが少ない。案内のポスター等を出してほしい。
- ・テーマが細分化されていたので、もっと複数のテーマに参加できる仕組みがあると良い。参加者同士がディスカッションできるような時間もあると良い。
- ・大学教員と事務職員の資格のような問題提起に関心があった。
- ・新しく明るく広い環境の中で、スムーズな運営をしていただいた。
- ・時間管理や配分、配布資料等、細かな点が上手くいっていなかった。
- ・名大の時と異なり、提示が少なく、わかりにくかった。
- ・机上でメモが取れ、しっかり聞くことが出来た。大学教育について多くのことを学ぶことが出来た。
- ・受付がまごついていて思う。新しいキャンパスで会場は良かった。
- ・プログラムは受付で配布いただけると良かった。
- ・分科会両方ともスライドが見にくい。電気を消してもいいのでは。
- ・会場までの案内が不親切。看板・掲示無しは分かりづらい。有料でこれはひどい。
- ・内容は良かったが、寒かった。
- ・場所について案内があり、分かりやすかった。
- ・各分野・立場の方々が日頃の業務や教育活動において感じること、疑問に思ったり興味を感じることが手に取るようにわかり、立場を超えて意見交換が出来る場が学内外で必要であることを痛感した。
- ・興味深いテーマを取り上げていただき参考になった。
- ・時間は守ってほしい。チャイムは必ず切ってほしい。
- ・基調講演について、質疑応答の時間がほとんどなかった。
- ・基調講演時明るすぎてスクリーンが見にくかった。
- ・寒かった。質問者にマイクがないので聞き取りづらかった。
- ・受付がスムーズでよい。会場が広くて集中して聞くことが出来た。
- ・充実したものではあったが、AV 機器の準備が不十分な点がある等、若干手抜き感が目立った。
- ・プログラムを PDF のみとし、配布物もアンケートのみで経費や準備の面でシンプルにしたことは、良かったと思う。
- ・交流の場にもなり、良い。
- ・リハーサル不足。

フォーラムの発展のためにどのような改善が必要だと思いますか？（自由記述）

- ・司会者と発表者でもう少し打ち合わせをしたほうが良い。発表内容をもう少し絞ったほうが良い。
- ・地域のニーズを良く知ること。

- ・分科会でフロアが自由に発言できる機会を増やしてほしい。クリティカルシンキング教育をテーマとした分科会を設けてほしい。
- ・会場校の見学。
- ・内容は大変興味深く、知識が得られるのでよいが、参加費が不要であるとありがたい。
- ・分科会によって運営に差があるようです。テーマごとで難しいところもあると思うが、ある程度軸などがあると良い。
- ・参加費なしだと参加しやすく、すすめやすい。
- ・事例報告は参考になる。
- ・高等教育系の内容については、中部圏だけでなく関東・関西の先進的な事例がほしい。プロパー職員だけでなく、他業界から転職してきた職員の話を知りたい。
- ・昨年度までの動きのほうが良かったと思う。テーマに関する適切な内容であってほしい。司会進行と発表者の打ち合わせがあるともっとよくなると思う。
- ・他分科会も聞きたいものがあつたので、自由に行き来できる仕組みがあると良い。
- ・分科会の発表者がそのテーマに本当にふさわしく、テーマに沿った発表が可能なのか厳選する必要がある。京都で開催されるFDフォーラム等の分科会と比較して、ポイントの絞れていない発表が複数あつた(分科会2)。
- ・基調講演の資料と映写の画面の内容がアンマッチで、わかりにくかつた。
- ・フォーラムの存在を知人に聞いてはじめて知つたので、もっと色んな宣伝をしてもいいのでは。
- ・午前・午後の部を設け、分科会に参加しやすくしたらどうか。本日の講演内容での有料はいかがなものか。
- ・国立大学の後期入試があるので、国立大学教員は参加しづらい。
- ・いろいろな条件もあり、難しいとは思いますが、時間配分です。担当される方がかなり苦労されていると感じた。午前から開催するということは辛いでしょうが、ご検討ください。
- ・愛知大学に初めて来て、迷いました。明確な表示があるとありがたいです。
- ・意見発表になっている部分もあるように感じられたので、意見交換が出来る時間、会等を増やしていただけるとより良くなるのでしょうか。
- ・司会の先生によって差がある分科会の濃さの平準化。
- ・会場でも入試がありましたし、この時期でよいのかと思いました。
- ・広く広報してもらえるとよりよいフォーラムになると思います。
- ・参加費が高い。演者に意図を正しく伝えて会を開催してください。
- ・分科会2は決められた時間を守ってほしい。明るすぎてスクリーンが見にくかつた。第一部と第二部の間にポスターセッションを挟むのも良いと思います。
- ・時間管理をしっかりしてほしい。
- ・全体講演のテーマ設定、講演内容によりフォーラム全体の印象が大きく変わる。無理に全体講演を設定する必要はないのでは。
- ・とにかく寒かつた。「教育」改革フォーラムなので仕方ない面もありますが、地域貢献をテーマにするのであれば、次回は「研究」を焦点にした分科会もあつてもよいのではないかと。
- ・分科会の内容によって参加するかどうか決めるので充実させてほしい。ポスターセッションが少し少ない気がする。

- ・反対意見が出て、議論（ディスカッション・ディベート）などの会が一つくらいあっても良いかと思った。
- ・懇親会がほしい。
- ・基調講演の内容がプログラムのタイトルと違いがあった。入試の具体的な内容や変更点を聞きたいわけではなく、「高大接続のあり方」について聞きたかった。事前に打ち出されているプログラムを見て参加を決め、参加費も払っているため、そこはしっかりしてほしい。
- ・基調講演のタイトルと内容が合っているとは思えなかった。もう少しポイントを絞ってほしかった。
- ・補助金事業ではなくなり、規模が縮小したのは非常に残念ではありますが、FD・SDの一助となるべく、引き続き本事業が継続した取り組みがなされることを期待している。規模が小さくなったのであれば、一定のテーマ一つに基づいたセッションを圧縮化しても良いのではないかと思います。
- ・毎年楽しみにしている方も多いと思うので、10月くらいには開催日程と場所のアナウンスをいただければと思う。個人レベルでもSNS等を通じて関係の方にこのイベントを早くから周知できますので。
- ・各大学の事務局部門の協力が必要と認識します。

フォーラムプログラム

<http://tokai-forum.jp/images/program2016.pdf>

[提供したサービス]

◎情報配信サービス

高等教育研究センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせするサービスを行っております。情報配信サービスへのご登録をご希望の方は、以下の要領でお申し込みください。なお戴いた個人情報は厳重に管理し、本サービスの配信以外の目的では使用いたしません。

お申し込み要領

1. タイトルに「情報配信サービス希望」とお書き下さい。
2. 本文中にお名前、ご所属、メールアドレスをお書き下さい。
3. 以上のメールを info@cshe.nagoya-u.ac.jp へお送り下さい。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/info/>

◎メンタープログラム

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものである。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するプログラムである。このプログラムでは、新任教員をメンティ教員、そのメンティ教員を支援する教員をメンター教員と呼ぶ。メンタープログラムは大学以外の組織でも広く導入されており、キャリア支援や社会的・心理的な支援の効果が確認されている。

教員メンタープログラムのねらい

教員メンタープログラムは、メンティ教員にとって以下のような効果が期待されます。

- ・職務や生活に関して気軽に相談できる相手を得る
- ・大学について理解を深める
- ・教育研究など職務上必要な知識やスキルを獲得する
- ・キャリアの展望を考えるきっかけになる
- ・メンター教員を介してさまざまなネットワークを作る

教員メンタープログラムは、メンター教員にとっても意義があります。新任教員との交流によって新しいアイデアや活力が得られたり、自らの教育研究を振り返り今後のキャリアを考えるきっかけになります。

2015年度は、連携型を含め7名の教員にメンタープログラムを提供した。メンター希望者の内訳は、表の通りである。新任教員研修での広報に加え、男女共同参画室と高等教育研究センターのウェブサイトで広報をしており、年間を通して随時申し込みの問い合わせを受けた。

表 2015年度新規メンタープログラム提供者数

女性教員	学内	5
	学外	1
男性教員 ※高等教育研究センターが提供。		1

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/mentoring/>

◎名古屋大学教員のための教育研修プログラム

社会に有為な学生を育てること、そのために質の高い教育を行うことは、どの研究科・学部においても重要であり、関心が高まっています。

高等教育研究センターでは、順次新たな研修プログラムを開発し、学内のみなさまのご要望にお応えできるよう努めています。各部局の教育力を高めるために、ぜひこのプログラムをご活用いただきたく、ご案内申し上げます。

この研修プログラムのねらい

各学部・研究科の教育力を高めることをめざします。

- ・授業改善に必要な基礎的な知識やノウハウを提供します
- ・各学部・研究科による組織的な授業改善の指針を提供します
- ・教育・授業についてのコミュニティをつくる支援をします

研修プログラム

各研修は90分を目安としていますが、ご要望に応じて内容を一部変更しての時間調整が可能です。

プログラム一覧

- ・現代の大学生
- ・シラバス設計法
- ・大学教授法の基礎
- ・メディアを活用した教授法
- ・多人数授業の教授法
- ・成績評価の方法
- ・大学教員という職業
- ・英語で教える方法
- ・メンタリングプログラムの進め方
- ・コーチングの技法
- ・教育改善のためのデータ活用

研修のすすめ方

1. 研修を希望される日の1ヶ月前までを目安に、高等教育研究センターまで随時ご連絡ください。その際、部局名、希望される研修プログラム、ご希望の日時、その他のご要望・ご事情についてお知らせください。

連絡先：高等教育研究センター東山キャンパス文系総合館5階

電話：内線5693（夏目達也研究室）

Fax：内線5695

E-mail：info@cshe.nagoya-u.ac.jp

2. お申し込みがあつてから2～3日の内にお返事を差上げます。なお、ご希望の日時に添えないときには、ご寛恕下さい。

3. 実施決定後、日時・内容・方法について貴部局担当者とセンター担当者による事前打ち合わせを行います。研修の対象者、ニーズなどをお聞かせ下さい。
4. このプログラムでは次のようなサービスをご提供いたします。
 - ・相談（部局のご要望をお伺いします）
 - ・企画（ご要望に沿って、研修当日の内容を組み立てます）
 - ・実施（研修当日の進行役を務めます）
 - ・教材（研修教材をご提供します）
 - ・研修の評価と今後の課題の整理（研修後に各学部・研究科のご担当者と高等教育研究センターの担当者で話し合います）
5. プログラム改善のため、研修参加者にアンケートをお願いしております。どうぞご協力ください。
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/program.html>

◎名古屋大学学生論文コンテスト

学問のススめ、論文へススめ。

学生生活にスパイスは足りていますか？

授業に出る、レポートを書く、試験勉強をする、
サークルに入る、友達と遊ぶ、本を読む、アルバイトをする・・・
まだまだもの足りない人へ
学問の香りのスパイスを贈ります
——さあ、論文へススめ！

○応募要項

論文内容

応募論文においてとりあげるテーマ／問いを明確に記述したうえで、文献等を活用して論じてください。内容領域は問いませんが、当該領域を専門としない人にも理解できるように記述してください。

応募期間

2016年1月8日（金）13時まで

応募資格

名古屋大学に在学する学部一・二年生

応募規定

- ・応募論文は、単著、未発表かつ日本語で書いたものに限りま
- ・審査対象論文は1人1編のみとします
- ・次項「応募方法」に掲載されている書式に従って、論文と応募用紙それぞれの電子ファイル（PDF または Word）を作成・提出してください

応募方法

1. 論文本編と応募用紙の書式電子ファイル（PDF または Word）を当ページからダウンロードしてください
 - ・論文本編（PDF）
 - ・論文本編（Word）
 - ・応募用紙（PDF）
 - ・応募用紙（Word）
2. 書式に従って論文と応募用紙を作成してください
3. 論文本編と応募用紙の電子ファイル（PDF または Word）を、件名「2015 論文コンテスト応募（応募者名）」で、下記メールアドレスへ期日内に送信して下さい
E-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp

審査

- ・本学教員による

表彰

- ・数名に賞状及び副賞

結果発表

- ・2016年2月を予定
- ・発表に際し、入賞者の所属学科および氏名を公表いたします
- ・入賞作品は名古屋大学学術機関リポジトリに掲載いたします

その他

- ・論文の書き方に関する各種文献を中央図書館 2階ラーニングcommonsおよび高等教育研究センター（東山キャンパス文系総合館5階）にて閲覧できます
- ・過去の入賞論文は名古屋大学学術機関リポジトリに掲載されています
- ・過去の受賞論文タイトル・テーマについては、以下のリンクから確認できます

主催：名古屋大学 高等教育研究センター、教養教育院

共催：名古屋大学 附属図書館

協賛：コクヨマーケティング株式会社、名古屋大学消費生活協同組合

事務局幹事：齋藤 芳子

事務局担当：谷口 千佳

- 経過：2015年4月 ポスター、チラシ、ウェブによる広報開始
 2016年1月 8日 応募締切
 2016年1月 15日 高等教育研究センター教員による予備審査
 2016年2月 3日 審査員4名（松下 裕秀理事・副総長、戸田山 和久教養教育院長、森 仁志附属図書館長、水谷 法美高等教育研究センター長）による本審査
 2016年2月 19日 表彰式

○受賞論文：

佳作 「なぜセンター試験は廃止されるのか 大学入試改革について」 経済学部 牧野 恵美さん

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/ug/>

名古屋大学 学生論文コンテスト 2015

✧ 論文内容 =
応募論文においてとりあげるテーマ／問いを明確に記述したうえで、文献等を活用して論じてください。内容領域は問いませんが、当該領域を専門としない人にも理解できるように記述してください。
(論文題目例がホームページに掲載されていますので、参照してください。)

✧ 応募期間 = 名古屋大学に在学する学部1・2年生

✧ 応募資格 = 2016年1月8日[金]13時まで

✧ 応募先 = (E-mail) info@cshe.nagoya-u.ac.jp

学問のススメ、論文へススメ。

学生生活にスパイスは足りていますか？
授業に出る、レポートを書く、
試験勉強をする、サークルに入る、
友達と遊ぶ、本を読む、
アルバイトをする……
まだまだもの足りない人へ
学問の香りのスパイスを贈ります
—— さあ、論文へススメ！

応 募 要 項

応募規定 ◎応募論文は、単著、未発表かつ日本語で書いたものに限りします。
◎審査対象論文は1人1編のみとします。
◎次項「応募方法」に掲載されている書式に従って、論文と応募用紙それぞれの電子ファイル(PDFまたはWord)を作成・提出してください

応募方法 ① 論文本編と応募用紙の書式電子ファイル(PDF または Word)を当ページからダウンロードしてください。
「論文本編(PDF)」 「論文本編(Word)」 「応募用紙(PDF)」 「応募用紙(Word)」
② 書式に従って論文と応募用紙を作成してください。
③ 論文本編と応募用紙の電子ファイル(PDF または Word)を、件名「2015論文コンテスト応募(応募者名)」で、応募先メールアドレスへ期限内に送信してください。

審査 本学教員による

表彰 数名に賞状および副賞

結果発表 ◎2016年2月を予定
◎発表に際し、入賞者の所属学科および氏名を公表いたします。
◎入賞作品は名古屋大学学術機関リポジトリに掲載いたします。

その他 論文の書き方に関する各種文献を中央図書館2階ラーニングcommonsおよび高等教育研究センター(東山キャンパス文系総合館5階)にて閲覧できます。

●主催=名古屋大学 高等教育研究センター・教養教育院
●共催=名古屋大学 附属図書館 ●協賛=コクヨマーケティング株式会社、名古屋大学消費生活協同組合
●問合せ先=名古屋大学高等教育研究センター 2015年度名古屋大学学生論文コンテスト事務局
Tel: 052-789-5696 E-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp URL: http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/

資料2 2015年度名古屋大学学生論文コンテストの応募論文題目

- ・なぜ、日本の大学生はTOEICの点数が低いのか
- ・発達障害学生への就職支援
- ・仕事に対する幸福感に最も影響を与えている要素に関する研究
- ・なぜ日本の大学には通信制の講義が少ないのか
- ・なぜ国立大学文系はなくなりそうなのか
- ・なぜセンター試験は廃止されるのか 大学入試改革について
- ・企業は大卒者にコミュニケーション能力を最も強く求めるのか
- ・なぜ若者は活字離れへと向かってしまうのか
- ・なぜ体育会系学生の就職における優位性が薄れたのか

資料3 2015年度名古屋大学学生論文コンテスト表彰式の様子



◎個別の授業改善支援

- ・授業の悩みの相談にのります
- ・授業を見学させてください。授業と一緒に見学しませんか
- ・高等教育研究センターの各種セミナーに参加しませんか
- ・高等教育研究センターのニューズレター『かわらばん』をご覧ください

○授業の悩みの相談にのります

「シラバスがうまく作れない」「学生が授業にのってこない」「学生の私語が多くて授業にならない」など、授業について悩みを抱えていらっしゃる先生方は少なくないと思います。どの教員も多かれ少なかれ悩みを抱えながら、授業をしているのが実情でしょう。

そのような場合には、一人で悩まずに、高等教育研究センターにご相談ください。授業改善の取り組みは一人でもできますが、できるだけ多くの方々、とくに同じような悩みを抱えた方々と積極的な議論や共同の取り組みを行うとより効果的にできます。多くの方との議論によって多くのヒントを得ることができ、授業改善の意欲も高まります。

授業でお悩みの場合には、まずは気軽に高等教育研究センターにご相談ください。連絡先は次のとおりです。

対 象：名古屋大学のすべての教職員

担 当：夏目（当センター教授）

T E L：内線 5693

E-mail：natsume@cshe.nagoya-u.ac.jp

○授業を見学させてください。授業と一緒に見学しませんか

高等教育研究センターでは、すぐれた授業とは何か、それを成立させるための条件とは何かについて研究しています。この研究のために、また『成長するティップス先生』の内容を改訂するために、すぐれた授業を行っている学内外の先生方から積極的に学ぶために、授業を見学させていただきたいと考えています。すでに一部の先生方からご協力をいただいています。

また、高等教育研究センタースタッフと一緒に授業見学を希望する方を募集しています。日々の授業を改善するための手っ取り早い方法は、他の教員の授業、それもすぐれた授業を見学することです。名古屋大学にはそのような授業がたくさんあるはずです。それをご一緒に発掘し、学んでみませんか。

授業見学でご協力いただける方、また、ご一緒に見学をしてみようとお考えの方は、下記までご連絡ください。

対 象：名古屋大学のすべての教職員

担 当：中島（当センター准教授）

T E L：内線 5692

E-mail：nakajima@cshe.nagoya-u.ac.jp

○高等教育研究センターの各種セミナーに参加しませんか

高等教育研究センターでは、各種のセミナーを開催しています。さまざまな角度から高等教育を研究している方や、高等教育改革を実践している方などをお招きして、お話を伺う招聘セミナー（ほぼ毎月

開催)、センターの客員教授としてお招きした国内・外国の研究者による客員セミナー（年3回程度）などです。これらは今後の名古屋大学の教育のあり方を考える上で重要な示唆に富むものになるように努力しています。

高等教育に関心をお持ちの方は、ぜひ気軽にご参加ください。資料を用意する関係で、事前にご連絡をお願いしています。また、メーリングリストに登録されますと、毎回確実に開催のご案内を差し上げます。メーリングリストへの登録は、下記の連絡先で受け付けております。また、セミナーで取り上げるテーマについて、ご意見やご要望ありましたら、遠慮なくご連絡ください。

対 象：名古屋大学のすべての教職員

担 当：中島（当センター准教授）

T E L：内線 5692

E-mail：seminar@cshe.nagoya-u.ac.jp

○高等教育研究センターのニューズレター『かわらばん』をご覧ください

高等教育研究センターでは、年4回、ニューズレター（『かわらばん』）を発行しています。国内外の高等教育をめぐる動き、学内教員や学外研究者などによるエッセイ、高等教育研究センターの活動報告など、内容は盛りだくさんです。ニューズレターは印刷物として発行していますが、以下のページでもご覧になれます。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/>

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/support/>

◎「英語による授業実践 DVD」貸出サービス

「英語による授業実践 DVD」を刊行しています。

ご視聴をご希望の学内教職員にはお貸し出ししますので、下記宛てにご連絡ください。

- ・ 高等教育研究センター事務室 (9:00～16:00)
- ・ 内 線：5696
- ・ E-mail：info@cshe.nagoya-u.ac.jp

◎冊子閲覧・配布

高等教育研究センターがこれまでに開発した冊子等を閲覧できるようにしています。在庫があるものについては学内教職員の希望に応じて配布しています。

また、東海高等教育研究所（1990年～2009年）の刊行物や資料を承継し閲覧に供しています。

[提供中のオンラインサービス]

◎新任教員ハンドブック

新任教員ハンドブックを職員課・教育企画課をはじめ関係部局のご協力により改訂しました。本センターWEBサイトよりPDF版をご覧ください。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/handbook_2016.pdf

◎高等教育グロサリー

高等教育にかかわる様々な用語を解説しています。

本センターの季刊紙『かわらばん』より「高等教育グロサリー（旧：カリキュラムグロサリー）」を随時転載していきます。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/he_glossary/

◎ファカルティガイド

必要な情報にさっとアクセスできるように、トピック別に背景や論点と手法を簡潔にまとめた1枚もののガイドです。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/>

◎ティップス先生からの7つの提案

名古屋大学の学生・教員・職員がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイデアをまとめたものです。

名古屋大学では、さまざまな優れた教育活動が実践されています。主に学内での調査を通じて収集した教育実践例をデータベース化し、教授法研究や学習理論研究の成果に基づいて、それらを整理し、簡潔な表現にまとめて提供しています。

なお、「ティップス先生からの7つの提案」は冊子版でも公開しております。名古屋大学の教職員の方には配布しておりますのでご連絡ください。また学外で冊子版を希望される方は、出版業者（石川特殊特急製本株式会社、連絡先 052-231-2127）まで直接ご連絡ください。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

◎成長するティップス先生

成長するティップス先生—名古屋大学版ティーチングティップス—（以下ティップス）の目的はとてもシンプル。つまり、われわれ教員が日ごろの教育活動のなかでしばしば出会う困ったこと、悩みの解決のためにちょっとしたヒントをさし上げようということです。とりわけ初めて教壇に立つ教員の方々に有益なアドバイスとなることを念頭において制作しましたが、経験豊富な教員にとっても、困ったことが生じたり、立ち止まって自分の授業を振り返り改善しようとするときに役立つものになっているはず。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/introduction/introduction.html>

◎ティップス先生のカリキュラムデザイン

このハンドブックは、名古屋大学の学部や研究科などで教育プログラムやコースの開発を担当する教職員のみなさんにとって役に立つカリキュラムデザインの要点や方法を、わかりやすくステップで説明するものです。ティップス先生のように、はじめてカリキュラムの改訂を担当することになった方々を主な読者に想定しています。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/curriculum_design.pdf

◎名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック

名古屋大学の教員有志によって立ち上げた留学生研究会で作成しました。本冊子は、教員と留学生が信頼関係を築く上で参考になると思われるアドバイスや各種情報をまとめたものです。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ryugakusei/hashigaki/index.html>

◎科学コミュニケーション Starter's Kit

科学コミュニケーションを始めたい研究者のために

- ・科学コミュニケーションとはなにか
- ・科学コミュニケーションの場をどうつくっていくか
- ・どのように科学コミュニケーションを行ったらよいか

について役立つ情報とノウハウを集めた実践ガイドです。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/scicomkit/>

◎新入生のためのスタディティップス

一連の小冊子からなるシリーズです。「ティップス (tips)」とは、「秘訣・ヒント・こつ」などを意味します。「主体的な学習者」になることがなぜあなたにとって価値があり意味あることなのか。どうしたら学習姿勢を主体的なものに切り替えることができるのか。そのために役立つさまざまな秘訣について、提供していきます。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/stips/>

◎シラバステンプレート

実際に使用されているシラバスをテンプレートという形で公開しています。ワードファイルでも公開していますので、シラバス作成時に役立てていただければと思います。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/syllabus.html>

◎シラバス英文表記のための例文集

シラバスの重要な項目である、授業の目的と到達目標、成績評価方法、授業計画について、シラバスとしての質を最低限担保する最もシンプルな基本文型を示しました。また、キーワードを入れ替えることで、さまざまな分野のシラバス作成に対応できるようにしました。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/esyllabus.pdf>

◎ミニットペーパーテンプレート

授業中、学生に記述させるコンパクトな質問用紙です、用途や目的に応じて、「リアクションペーパー」「ワーキングペーパー」「コメントペーパー」とも呼ばれます。

PDF ファイル、エクセルファイルでテンプレートを公開しております。文言等を変更して使用することもできます。お役立てください。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/minute.html>

◎ゴーイングシラバス

大学教員のコースデザイン力の向上と授業支援を目的として制作されたシステムです。「シラバス」「お知らせ」「授業記録」「みんなの部屋」の4つのパートから構成され、オンライン上で操作することができます。また、ゴーイングシラバスを上手に活用するための「コースウェア」もオンライン上で利用できます。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/gs.html>

◎名大の授業

名古屋大学は、授業の一部を選び、そこで実際に使われている教材を電子化しインターネット上で無償公開する事業を行っています。

これは、授業教材をインターネット上で公開することで、普段は見ることのできない名古屋大学の教育の一端を、社会へ広く情報発信しようとするものです。学生の自学自習教材としての活用だけでなく、教員と学生、教員と学外者、そして教員同士の交流・インタラクションを期待しています。

この事業は、名古屋大学オープンコースウェア運営協議会が運営しており、日本オープンコースウェア・コンソーシアム（JOCW）と連携しています。

<http://ocw.nagoya-u.jp/>

◎東海高等教育研究所が刊行した『大学と教育』

東海高等教育研究所に掲載された論文のうち、執筆者の許諾が得られたものをウェブサイトに掲載しています。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/projects/tokaiken/>

[学内貢献]

教養教育院全学教養部会	主査	夏目達也
教養教育院教育システム管理委員会	委員	夏目達也
全学教育企画委員会	委員	夏目達也
文系総合館管理運営委員会	委員	夏目達也
教養教育院FD・教員データベース専門委員会	専門委員	中島英博
教育改革ワーキンググループ	委員	中島英博
大学のデジタル教科書の共同制作と流通検討学内ワーキンググループ	委員	夏目達也 中島英博
AC21 推進室	推進室員	中島英博
男女共同参画室メンターワーキンググループ	委員	中島英博
名古屋大学オープンコースウェア運営協議会	運営委員	中島英博
国際教育運営委員会	委員	中島英博
教養教育院評価専門委員会	専門委員	齋藤芳子

[学内講師派遣]

○2015年4月7日 名大生入門講座「基礎セミナーってどんなもの？」

講 師：中島 英博

主 催：名古屋大学生協

会 場：南部食堂

対 象：名古屋大学新入生

参加者：30名

○2015年7月29日 公正研究セミナー「公正研究セミナー 研究遂行の倫理」

講 師：齋藤 芳子

主 催：理学研究科

会 場：理学南館理学セミナー室

対 象：研究科大学院生

参加者：30名

○2015年9月15日 PI育成セミナー「Researching with Integrity」

講 師：齋藤 芳子

主 催：文部科学省科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業
「連携型博士人材総合育成システム」・名古屋大学

会 場：ESホール

対 象：北大・東北大・名大におけるPIおよび将来PIをめざす人

参加者：40名

○2015年10月29日 情報工学コースFD「多様な学生を指導する工夫」

講 師：中島 英博

主 催：工学研究科情報工学コース

会 場：IB電子情報館011講義室

対 象：教員

参加者：30名

○2015年11月2日 公正研究セミナー「Researching with Integrity」

講 師：齋藤 芳子

主 催：理学研究科

会 場：理学南館理学セミナー室

対 象：研究科大学院生

参加者：13名

○2015年11月6日 医学部附属病院看護部研修「コーチング」

講 師：中島 英博
主 催：医学部附属病院看護部
会 場：名古屋大学医学部附属病院
対 象：病院看護師
参加者：18名

○2015年11月16日 附属図書館ワークショップ

「自分のあたまで考えられる人になろう！ 挑戦！クリティカル・シンキング」

講 師：中島 英博
主 催：名古屋大学附属図書館
会 場：名古屋大学附属図書館
対 象：教職員・学生
参加者：22名

○2015年11月26日 附属図書館ワークショップ

「自分のあたまで考えられる人になろう！ 挑戦！クリティカル・シンキング」

講 師：中島 英博
主 催：名古屋大学附属図書館
会 場：名古屋大学附属図書館
対 象：教職員・学生
参加者：20名

○2015年12月2日 研究倫理に関する特別講演「信頼される研究者になろう！」

講 師：齋藤 芳子
主 催：生命農学研究科
会 場：生命農学講義棟第8講義室
対 象：研究科大学院生
参加者：20名

○2015年12月21日 大学院共通科目「エンプロイアビリティ・キャリアデザイン論」

「研究者になるためのスキルと準備」

講 師：齋藤 芳子（ゲスト講義）
主 催：ビジネス人材育成センター・学生相談総合センター 提供科目
会 場：NIC館セミナー室
対 象：授業履修者
参加者：7名

[学外講師派遣]

○2015年8月2日 大学新任教員のための研修会 2015「大学教員になるということ」

講師：夏目 達也

主催：日本私立看護系大学協会

会場：東京ガーデンパレス

対象：日本私立看護系大学の新任教員

参加者：150名

○2015年8月10日 河合塾トライデント教員FD「高等教育におけるキャリア教育」

講師：夏目 達也

主催：河合塾トライデント

会場：河合塾トライデント

対象：トライデント校教員

参加者：20名

○2015年8月18日 河合塾トライデント教員FD「高等教育におけるキャリア教育」

講師：夏目 達也

主催：河合塾トライデント

会場：河合塾トライデント

対象：トライデント校教員

参加者：20名

○2015年8月20日 トライデント夏季FD「アクティブラーニングに備える」

講師：中島 英博

主催：トライデント専門学校

会場：トライデントアドバンス棟8F

対象：教員

参加者：25名

○2015年8月26日 SPOD フォーラム「ケースで学ぶ大学リーダーシップ」

講師：中島 英博

主催：四国地区大学教職員能力開発ネットワーク

会場：愛媛大学

対象：教職員

参加者：40名

○2015年9月2日 東京家政大学FD「教育改善を楽しく進めるためのヒント」

講師：夏目 達也

主 催：東京家政大学
会 場：東京家政大学
対 象：東京家政大学教職員
参加者：100名

○2015年9月11日 椙山女学園大学FD「発問で思考を促す授業をつくる」
講 師：中島 英博
主 催：椙山女学園大学
会 場：椙山女学園大学
対 象：教員
参加者：80名

○2015年9月28日 IDE Japan Seminar「Global Competitiveness of Japanese Higher Education」
講 師：中島 英博
主 催：アジア経済研究所
会 場：アジア経済研究所
対 象：研究員
参加者：6名

○2015年9月30日 南山大学経営学部・大学院経営学専攻・ビジネス専攻FD
「アクティブラーニング入門」
講 師：中島 英博
主 催：南山大学経営学部
会 場：南山大学
対 象：教員
参加者：30名

○2015年11月19日 学術情報リテラシー教育担当者研修
「『大学生に効果的な教授法』 + 『プレゼンテーション技法』」
講 師：夏目 達也
主 催：国立情報学研究所
会 場：国立情報学研究所
対 象：全国の大学図書館職員
参加者：60名

○2015年11月20日 東洋大学教育改善シンポジウム「教育評価の厳格化とEPAの活用」
講 師：夏目 達也
主 催：東洋大学
会 場：東洋大学

対 象：東洋大学教職員

参加者：30名

○2015年11月27日 マネジメントセミナー

「大学マネジメントと執行部の役割に関する概況と課題」

講 師：夏目 達也

主 催：国立大学協会

会 場：国立大学協会

対 象：国立大学協会

参加者：80名

○2015年12月4日 AXIES 2015年次大会「デジタル教科書活用における授業設計の課題」

講 師：中島 英博

主 催：AXIES 2015

会 場：愛知県産業労働センター・ウインクあいち

対 象：教職員、一般

参加者：40名

○2016年1月15日 名古屋市立大学メンター講演会

「名古屋大学における教員メンタープログラムの取り組み」

講 師：中島 英博

主 催：名古屋市立大学男女共同参画室

会 場：名古屋市立大学

対 象：教職員

参加者：11名

○2016年2月17日 FD セミナー「大学教育における成績評価の適正化」

講 師：夏目 達也

主 催：神奈川県立保健福祉大学

会 場：神奈川県立保健福祉大学

対 象：大学教員

参加者：50名

○2016年2月25日 国立遺伝学研究所講習会

「研究発表ポスターをつくるー学術情報デザインの理論と実践」

講 師：齋藤 芳子（遠藤 潤一氏と共同）

主 催：情報・システム研究機構 女性研究者活動支援室／国立遺伝学研究所 女性研究者活動支援室

会 場：国立遺伝学研究所

対 象：情報・システム研究機構所属者

参加者：30名

○2016年3月15日 メンター研修「メンター制度：導入のコツとメリットについて」

講師：中島 英博

主催：岐阜大学男女共同参画室

会場：岐阜大学

対象：教職員、一般

参加者：21名

○2016年3月25日 FD研修会「主体性を高める授業の取り組み」

講師：中島 英博

主催：石川県立看護大学

会場：石川県立看護大学

対象：教員

参加者：38名

3. 教育

[兼任]

教育発達科学研究科高等教育学講座	夏目達也
教育発達科学研究科高等教育学講座	中島英博

[授業担当]

学士課程

「大学でどう学ぶか」（全学教養科目）	夏目達也
「基礎セミナーA」（基礎セミナー）	中島英博
「基礎セミナーB」（基礎セミナー）	中島英博

大学院教育発達科学研究科

高等教育学研究Ⅰ－大学教員準備講座	夏目達也・中島英博・齋藤芳子【大学院共通科目】
高等教育経営論（大学職員論）	夏目達也
高等教育経営論（キャリア形成支援）	夏目達也
高等教育内容論（調査・研究方法入門）	中島英博
高等教育経営論（大学組織論）	中島英博
高等教育経営論（政策過程論）	丸山和昭

教養教育院大学院共通科目

大学教員論（教育発達科学研究科「高等教育学研究Ⅰ」を提供）	夏目達也・中島英博・齋藤芳子
アクティブラーニングの技法	中島英博

4. 社会貢献

○夏目達也

- ・大学教育学会常任理事（2015年6月～2017年5月）
- ・高等教育学会理事（2015年6月～2017年5月）
- ・フランス教育学会理事（2013年6月～2016年5月）
- ・愛知県産業教育審議会委員（2015年4月～2017年3月）
- ・名古屋まち・ひと・しごと創生推進会議委員（2015年4月～2016年3月）
- ・学生タウンなごや推進ビジョン有識者懇談会委員（2015年4月～2016年3月）

○中島英博

- ・一般社団法人大学教育学会代議員（2015年4月1日～2019年3月31日）
- ・千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター・FD マザーマップコンテンツ開発外部委員（2015年6月1日～2016年3月31日）

○齋藤芳子

- ・研究・イノベーション学会評議員（2002年10月～[中断期間あり]）
- ・研究・イノベーション学会編集委員（2012年3月～）

5. 管理運営

[人員]

◎定員

センター長(兼任)	教授	准教授	助教	計
(1)	1	2	1	5 (1)

センター長：水谷 法美

教授：夏目 達也

准教授：中島 英博

准教授：丸山 和昭 (2015年10月より)

助教：齋藤 芳子

◎専任教員プロフィール

○夏目 達也

学位：教育学修士

専門分野：高等教育論、職業教育論

所属学会：・高等教育学会

・大学教育学会

・フランス教育学会

・日本産業教育学会

・日本教育学会

・比較教育学会

・IDE 大学協会

○中島 英博

学位：博士(経済学)

専門分野：高等教育論、高等教育マネジメント

所属学会：・高等教育学会

・大学教育学会

・日本教育工学会

・日本教育社会学会

・日本経済学会

○丸山 和昭

学位：博士(教育学)

専門分野：教育社会学、専門職論、高等教育論

所属学会：・日本教育社会学会

- ・日本教育制度学会
- ・日本教育行政学会
- ・東北教育学会
- ・東北社会学会
- ・日本産業教育学会
- ・日本教育学会
- ・大学教育学会
- ・日本高等教育学会

○齋藤 芳子

学 位：修士（工学）

専門分野：科学技術社会論、科学技術政策

所属学会：・研究・技術計画学会

- ・科学技術社会論学会
- ・日本高等教育学会
- ・大学教育学会
- ・日本科学哲学会
- ・日本物理学会
- ・日本金属学会
- ・European Association for the Study of Science and Technology
- ・Society for Social Studies of Science

◎アシスタント

岡田 久樹子

谷口 千佳（2015年5月より）

熊澤 一樹

市岡 紘平

川岸 敬生（2016年1月より）

◎海外客員研究員

2015.4～2015.7 ジョシ・マヘンドラ・キショア
（インド・マハラジャ クリシュナクマリシン バーヴナガル大学）

2015.12～2016.3 寶 心浩（中国・上海外国語大学日本文化経済学院）

◎国内客員研究員

2015.4～2015.7 深堀 聰子（国立教育政策研究所）

2015.8～2015.11 吉武 博通（筑波大学）

2015.12～2016.3 向後 千春（早稲田大学）

[経費]

高等教育研究センターの収入一覧

(単位：千円)

交付金/授業料	(うち学内競争的資金)	科学研究費補助金	小計
13,840	(1,050)	1,496	15,966

注) 学内競争的資金は「総長裁量経費(教育奨励費)、総長裁量経費(地域貢献特別支援事業)」を指す。

高等教育研究センターの学内競争的資金配分

テーマ名	金額(千円)
「名古屋大学教員ハンドブック改訂版」の制作	630
愛知県地域における中小規模大学のFD・SD共用実施支援	420

[運営委員会]

◎委員

水谷 法美	高等教育研究センター長/工学研究科 教授
伊藤 彰浩	教育発達科学研究科 教授
柳原 光芳	経済学研究科 教授
河野 浩	理学研究科 教授
亀井 譲	医学系研究科 教授
松本 耕二	多元数理科学研究科 教授
戸田山 和久	教養教育院長 教授
夏目 達也	高等教育研究センター 教授
中島 英博	高等教育研究センター 准教授
丸山 和昭	高等教育研究センター 准教授 (2015年10月～)

◎開催日程

2015年 6月25日(木)	13:00~14:05	第1回運営委員会
2015年 12月11日(金)	11:00~11:40	第2回運営委員会
2016年 3月10日(木)	13:30~13:55	第3回運営委員会

[センター会議 開催日程]

2015年 4月10日(金)	第1回センター会議
2015年 5月 1日(金)	第2回センター会議
2015年 6月 4日(木)	第3回センター会議
2015年 7月 3日(金)	第4回センター会議
2015年 8月 6日(木)	第5回センター会議
2015年 9月 2日(水)	第6回センター会議
2015年10月 2日(金)	第7回センター会議
2015年11月 6日(金)	第8回センター会議
2015年12月 4日(金)	第9回センター会議
2016年 1月 8日(金)	第10回センター会議
2016年 2月 4日(木)	第11回センター会議
2016年 3月 4日(金)	第12回センター会議

編集委員長	水谷 法美	センター長
	夏目 達也	教授
	中島 英博	准教授
	丸山 和昭	准教授
編集幹事	齋藤 芳子	助教
編集補助	岡田 久樹子	事務補佐員
同上	谷口 千佳	事務補佐員

名古屋大学高等教育研究センター
2015 年度年次活動報告書

2016 年 3 月 31 日

発行 名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601
名古屋市千種区不老町
電話 052-789-5696 (事務室)
FAX 052-789-5695
E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

